

社会の動きを、 地域・親子で考えよう

公民館・コミュニティセンターで
出来る新聞活用（地域NIE）



社会の動きを、地域・親子で考えよう

公民館・コミュニティセンターで出来る新聞活用（地域NIE）

鳴門教育大学

社会の動きを，地域・親子で考えよう

－ 公民館・コミュニティセンターで出来る新聞活用（地域N I E）－

目 次

1	はじめに	・・・	2
2	地域N I Eとは	・・・	3
3	地域N I Eと学校教育	・・・	4
4	本冊子の使い方（地域でチャレンジ！）	・・・	5
5	全国各地で実践されている新聞活用例（実践及び提案）	・・・	7
	（1）「地域N I E」のこれまでとこれから		
	（2）地域N I E（新聞講座）の実践プログラムについて －地域N I E指導者養成講座と市民講座－		
	（3）「新聞ヨム、社会ワカル、投票率カワル」 －情報を多面的にとらえ、自ら読み解く力を磨く－ 「読み、生かし、味わう～『しんぶんカフェ』の試み」 －テーマ別、対象者別の実践講座－		
6	提案したい取り組みと資料	・・・	67
	（1）新聞記事を活用した地域防災の取り組み －事前準備を考える「防災万全隊（ばんぜんたい）」－		
	（2）新聞記事を活用した家庭学習の支援 －注目される記事を使う－ －活用できるN I E用ワークシート－	・・・	73
	識者の声 －地域N I Eの意義とは－	・・・	79
	編集後記 －地域N I Eを企画する－	・・・	82

1 はじめに

子どもたちの教育に新聞を活用するNIE (Newspaper In Education=教育に新聞を；「エヌアイイー」と呼ぶ) が注目を集めている。それは、“読解力育成”を代表とする学力向上策として、新聞を活用しようとする動きであり、教科書内でも数多く取り上げられるようになった。これには大きな意味がある。そもそも“読解力”は、読み書きという視点だけでは語れない。“非連続テキスト”と言われるグラフや図、写真などを読み解くことも必要であり、こうした能力は、これから生きる子どもたちにとって、重要な能力なのである。まさに新聞には、そうした素材が満載されており、格好の教材だといえよう。

もう一つ、社会の動きの中で、必須の教育になり得る要素を秘めている。昨今の世の中の動きは、先が見えない時代である。明るい未来なのか、厳しい現実が待ち受けているのか、それすら見えなくなっている。その上、これまで遭遇しなかった事件や事故が続出しており、その原因を突き詰めると、まさに“市民性”の欠如というべき事態が数多く見られる。

そうした中、学校教育で道徳教育などを重視する動きはあるが、教科書などを主体に教えても、現在の動きとかけ離れた知識の伝達に終わってしまう可能性が否めない。そこでNIEは、教科書に欠けている「いま」を補う教材として注目されているのである。ただ、学校教育だけに委ねても、その効果は期待できない。保護者や地域など、大人たちの動きが子どもたちを変えるのである。

今を考えると、政治への無関心が投票率の低下を生み、その結果、政治家の資質も望めない状況となっている。その結果、政治は信用できないとか、誰がなっても一緒という無責任な評論家だけが増加し、それが危うい道を作り出している。もっと、市民は賢くないといけない。それが、市民性育成の教育であり、NIEを目指す方向だといえるだろう。

本冊子は、日本NIE学会や日本新聞協会で提唱されてきた『地域NIE』を具現化するものであり、生涯学習の中で、NIEを活用しようとするものである。まさに市民による市民のための教育資料といえよう。なお、本冊子は、本学地域連携センターの研究プロジェクトとして、益井英子客員研究員（元鳴門市北灘中学校長）と共に作成したものである。

鳴門教育大学大学院教授・地域連携センター所属
（日本NIE学会常任理事）
阪 根 健 二

2 地域N I Eとは

N I Eは、学校だけでなく、家庭・地域でも実践できる活動である。新聞は日常的な情報源であり、特段新しいものではない。つまり、生涯学習の一環として適しているものであり、子どもから大人までの生涯を通して、社会と向き合う教育である。まさに少子高齢化が進んでいる中で重要な活動だといえよう。これまでの日本のN I E活動は、基本的に「学校」を中心に実施されてきた。その中で、保護者への啓発として、親子で新聞を活用した「ファミリー・フォーカス」が実践されてきたが、これも教員の提案から行われるものであり、家庭で新聞記事について話し合ってくるという課題設定があったからである。

それでは、学校を核に地域N I Eを進めるには何がポイントになるだろうか。学校で行われるN I Eを、公民館やコミュニティセンターで、親子や地域を巻き込んで実践することだろう。それによって、実社会とのかかわりが実感でき、自分の考えを深めさせ、これからの生き方に影響を与えるものと思われる。そもそも「家庭・地域との連携」は、現在の教育のキーワードである。学校と家庭・地域が、双方向の関係を持つことで、学校でのN I Eがより効果的になる。これは、これまでのN I E研究の成果から見えてきたものであり、地域N I Eの可能性はここにある。

そこで、公民館やコミュニティセンターで、N I E講座（あるいは茶話会）などを企画することから始めたい。講師は特段の必要はなく、テーブルを囲んで、新聞を読むことで十分である。もし、近隣にN I E実践の教員（特に退職教員）や元新聞記者が在住していれば申し分なく、話し合いながら講座を企画すればいいのである。

本冊子では、これまで地域でN I Eを実践してきた事例を、全国から収集した。特に、元中学校教員の渡辺裕子氏は、仙台で「地域N I E」にとりくんできた。かつて教員として新聞活用を取り入れた経験を生かし、今度は場所を地域社会に移しての実践である。これは、地域のコミュニケーションの再生を図る実践であるだけでなく、健全育成にも資するものであり、貴重な実践である。また、元新聞記者である赤池幹氏、越地真一郎氏からは、地域での貴重な実践資料を提供いただいた。大学関係からも、横浜国立大学名誉教授（元日本N I E学会会長）の影山清四郎氏は、地域の市民大学の講師も務められ、地域N I Eの提唱者であり、本冊子の基調を成すものである。

3 地域N I Eと学校教育

近年の学校教育の課題に、学力問題がある。今、全国学力・学習状況調査（全国学力テスト）は、保護者にとって、大きな関心事項である。また、テスト結果の公表をめぐって、そのあり方に賛否が渦巻いている。これまでも、様々な統計において、都道府県別の結果が公開されることが多いが、どうしてもその順位が気になる。これが都道府県対抗戦となり、学力問題では、その矛先が学校に向かっているのである。

では、学力問題は、学校だけの問題だろうか。前述の調査では、家庭での学習環境の結果についても公開されている。その内容は多岐にわたるが、例えば、スマホ等の使用時間と学力とは大きな関連があることが分かった。これは当然のことであり、スマホに要する時間が多ければ、家庭学習がほとんどできない状況である。また、食事や睡眠との関係もあった。このように、学力問題が家庭教育との関連があるとするならば、学力向上の一番の対策は、家庭教育の充実ではあることはいままでのない。

しかし、家庭には踏み込めないし、対応も分からないという声が多く聞かれる。確かに、個々の家庭の問題は、プライベートな部分である。ここに踏み込むとすれば「社会教育」が突破口になると思われる。いわゆる地域や家庭での教育を、いかにコーディネートするかという視点である。子どもたちに家庭で、どんな学習をさせるのか、また、学校と家庭・地域とをどう連携させるかを啓発し、取り組めるところは、社会教育であろう。学校が悪い、家庭が悪いと押しつけあっても何も変わらない。まさに双方をつなぐ努力をすべきであろう。

そこで、公民館やコミュニティセンターなどが大きな役割を果たすことが出来るのではないかと考えている。その素材に、「新聞」を使うことをお勧めしたい。それは、新聞の意義や役割からである。そもそも新聞は今の社会を知らせてくれる。また、年齢に関係なく、誰しも読めるような構造になっており、学校でも、新聞などの評論文の読み方を教えている。とすれば、新聞を持ち寄り、大人も子どもも一緒に読むことで、学習の機会を与えるのではないだろうか。土曜日に講座を開くことも一考である。地域で実践するN I Eは、単に地域住民だけでなく、子どもたちへの対応も含んでいるのである。

4 本冊子の使い方（地域でチャレンジ！）

本冊子は、提言だけでなく、そのまま印刷すると、地域で活用できるページも用意されている。

収蔵されている資料

1 全国各地で実践されてきた事例

実際の各地の公民館などで実践された内容や方法を紹介している。特に、新聞を活用した事例は貴重であり、是非参考にされたい。

2 使える資料やワークシート

例えば、防災に取り組む地域では、避難訓練に終始して、いわゆる”防災疲れ”が起きている。こうした地域では、まずは情報を新聞などの記事に求め、課題を洗い出した上、楽しめるような企画を考えたい。ここでは、「防災万全隊」の取り組みを提言したい。

3 企画と実践

「どう企画すれば良いか？」という質問が多く寄せられる。確かに、その手法によって、成功の可否が決まる。本冊子は、社会教育の指導者や、地域イベントを企画している方を対象にしており、その手法を紹介することに意義がある。全国の事例紹介には、各種の仕掛けがあり、それが成功の秘訣といえる。

4 学校教育との連携

地域の学校と連携することは特に重要である。しかし、いきなり訪問し、依頼してもうまくいかない。今、学校でどんな課題があるか、それを知り、そこに入り込める人材が求められている。例えば、社会教育主事や社会教育委員、公民館長、学校地域本部の役員など、コーディネートする人材を育成する必要がある。

もし、学力に課題があれば、家庭学習の支援を行うこと、あるいは土曜活用に課題があれば、土曜に実施する学力向上イベントを行うことも、学校としてはありがたいのではないだろうか。そこに教員の出席を求めると、結果的に学校の過重負担を与えるだけになってしまいます。あくまでも、地域人材が主なのである。ここで紹介している新聞講座は、読解力の育成に資するものであり、学校外の教育活動である。こうした工夫が求められているのである。

全国各地で実践されている
新聞活用例（実践及び提案）

「地域N I E」のこれまでとこれから

N I E教育コンサルタント

渡辺 裕子（東北福祉大学）

1 2006年、宮城から「地域N I E」を提唱

学校から飛び出したN I Eとして試行錯誤の末に、「地域N I E」を本格的にスタートさせ、それを提唱したのが2006年4月。仲間とともに始めた「地域N I E巡回講座」は田園地帯の小さな公民館から始まった。そもそもは、2004年に韓国のファミリー・フォーカスを視察したのがきっかけだった。「韓国が家庭のN I Eなら、日本は家庭にとどまらず、地域のN I Eだ！ならばネーミングは『地域N I E』としよう！」。青写真はすぐにできた。しかし、そのころに『地域N I E』を理解してもらうのは、とても容易なことではなかった。それもそのはず、当時の「N I E」はまだまだ「ニエ」「ニー」と読まれることも珍しくない時代。誰もが「『地域でN I E？』まさか、そんなことはできっこないだろう」と言わんばかりの反応だった。新聞関係者でさえ、「N I Eは学校でやるもの。地域でやるのはN I Eとは言えない」と興味を示さなかった。しかし私たちは、そんな状況下ではあったが、学校から飛び出したN I Eを「地域N I E」として全県に先駆けて発信し、その理念を提唱したのだった。早いもので、あれからまもなく10年になろうとしている。

当初の「まさか！」の異口同音が、月日の流れとともに「地域でN I Eとは面白いですね。是非、見学させてください」と変わり、なんと新聞関係者はもちろん、地域の公民館館長、お寺の住職など、遠くは九州、北海道など、県内外から次々と見学に訪れるようになっていた。今や誰もが認める立派な市民権を得るところまで広がってきたと言えよう。気がついてみれば、『地域N I E』の名称はあたりまえのように全国あちこちで飛び交うようになってきたし、それどころか一般の方からも「新聞を使ったコミュニケーションづくりはおもしろいですね」の声を聞くようになった。誠に喜ばしいことである。

2 「地域N I E」のねらい

(1) 地域力の再生

住民同士で地域を守り、子供の教育にもかかわっていたかつての日本の「地域力」にはすばらしいものがあつた。自分の幼いころを振り返ってみても、親だけでなく近所のおじさんやおばさん、お年寄りたちがいつも見守ってくれていた。悪いことをすれば当然のように叱ってくれた。また、大人同士でも近所

に困りごとがあれば、みんなで相談し合うという温かいつながりが、そこにはあった。しかし今日では、そんな地域力もいつの間にかなくなり、子供を守るどころか、幼い子どもたちが事件や事故に巻き込まれるというニュースが絶えない。おまけに核家族化が拍車をかけていることもあってか、子育ての相談相手が見つからないまま、地域で孤立している母親も少なくない。

「地域NIE巡回講座」では、このような実態を踏まえて、新聞を囲みながら隣近所のコミュニケーションを活発にすることで、子育てで悩む母親のために何か手助けできることはないか、子供たちを守り健やかに育てていくために地域の大人たちはどうあるべきかなどをも考えていきたい、そうすることで「地域のつながり」や「地域の力」を取り戻せるのではないかと考えた。

（2）異世代間の交流

現代の子供たちは、どちらかといえばメールなど互いに顔の見えない相手とのコミュニケーションは比較的とれるようだが、その一方で対面コミュニケーションについては苦手意識を持っている子が多いようだ。同世代もさることながら、異世代間ではコミュニケーションのきっかけすら掴めないでいるという子も珍しくない。自分と異なる価値観を持つ他者との出会いの機会を持たない子どもたちは、少数の仲間と固まって行動するしか方法が分からないという子もいるのではないか。また、家庭内においては、親族が一堂に会したりする機会も少なくなっている昨今、異世代との関わりから学ぶという体験もなかなか得がたいものになっている。考えてみれば、それらのコミュニケーション力は大きくなれば備わるというものではなく、大人がゆっくりと向き合う時間を割いてやってこそ備わっていくものではないかとも、考えられる。保護者を含めた地域の大人が、子供たちのために価値観の違う他者との、あるいは異世代間との交流の機会を作ってやることは、社会性を身につける意味でも大いにプラスになると考えた。

3 「地域NIE」のもう一つのねらいと、その位置づけ

地域NIEには、2に挙げた「地域力の再生」「異世代間交流」のほかにもう一つのねらいがある。それは、家庭NIE、学校NIE、職場（一般社会）NIEを時に側面から、時に基盤となって支援していき、そして、それぞれを太いパイプでつなげていくというねらいである。これは、NIE全体を支える基盤としてはもちろんだが、地域社会全体の繋役としても大切な役割を担うものであると位置づけている。

(1) 企業（職場）を支える「地域NIE」のようす

NIEでコミュニケーションスキルとプレゼンスキルを磨く一般企業の社内研修の様子



(2) 「地域NIE」の位置づけ

「地域NIE」が基盤になって支えて行く！



地域NIEは、地域社会全体の繋ぎ役も担うものである

4 今日までの「地域N I E」の歩み

韓国の視察から帰国してまもなく、まずは近所の親子を自宅に集めて（わずか2～3人だったが）、「新聞からいい人見つけたあ」や「新聞から喜怒哀楽を見つけよう」など、学校の授業でやっていたことを手掛かりに、簡単なワークショップを試行錯誤でやってみた。その都度、手ごたえを感じつつ、「誰かこの活動に加わってくれる人はいないか」と声をかけてみるも、まだまだ説得力のないしどろもどろの説明。当然ながらすぐには、理解は得られなかった。しかし、その後、小さな活動を少しずつ積み重ねていく中で、「いいですね！」と言ってくれる仲間が一人、二人と増えて行き、夢にまで見た「地域N I E」が、ついに本格スタートを切ることになったのである。青写真を温めてから約2年後、それは2006年4月のことだった。

あれから、丸9年が過ぎ、間もなく10年目を迎える。この間、あちこちに足を運ばせてもらった。そして、たくさんの人との出会いを通して、様々な感動を頂いてきた。ここで、今日までを振り返ってみたいと思う。以下に、これまでの主な歩みを簡単にまとめてみた。（なお、2006年から今日までの巡回講座の詳細は誌面の都合上、ここでは割愛させて頂く）

2004年夏～2005年（地域N I Eの青写真、熟考の期間）

近所の子供や母親たち（はじめはわずか2～3人）を集めての手探りのワークショップ。「新聞からいい人見つけたあ」「新聞から喜怒哀楽を見つけよう」「新聞記事スクラップノートづくり」など、学校での取り組みを持ち込んでの試行錯誤。まさに苦戦を繰り返していたころ。

2006年4月

「地域N I Eプロデュースセンター（注：）」を立ち上げ、同時に「地域N I Eキャラバン隊」を小・中学校の教員仲間、4人で結成。「地域N I E」を提唱し、地域の公民館、お寺、神社などでの「地域N I E巡回講座」がスタートした。

（注：2013年4月より「ことばの貯金箱夢プロジェクト」に名称変更）

2006年7月

第11回N I E全国大会（水戸大会）にて、地域N I E巡回講座「N I Eで向こう三軒両隣、新聞でしゃべりたい夢（む）」を発表。

2006年9月発行第47号「みやぎNIEだより（水戸大会に参加して）」から途中抜粋

・・・教育現場の方々からは、「新聞でこんな楽しいことができるなんて驚いた。地域の人と教員が刺激し合える、一つの理想形だ」との感想をもらった。ある新聞関係者からは、「学校から飛び出して巡回でNIE活動を地域に広げた例は全国初。NIEの新たな可能性を見た。感動した」という、嬉しい一言をもらった。いずれもこれからの活動に大いに励みとなる言葉だった。

（筆者 渡邊裕子）

2008年1月

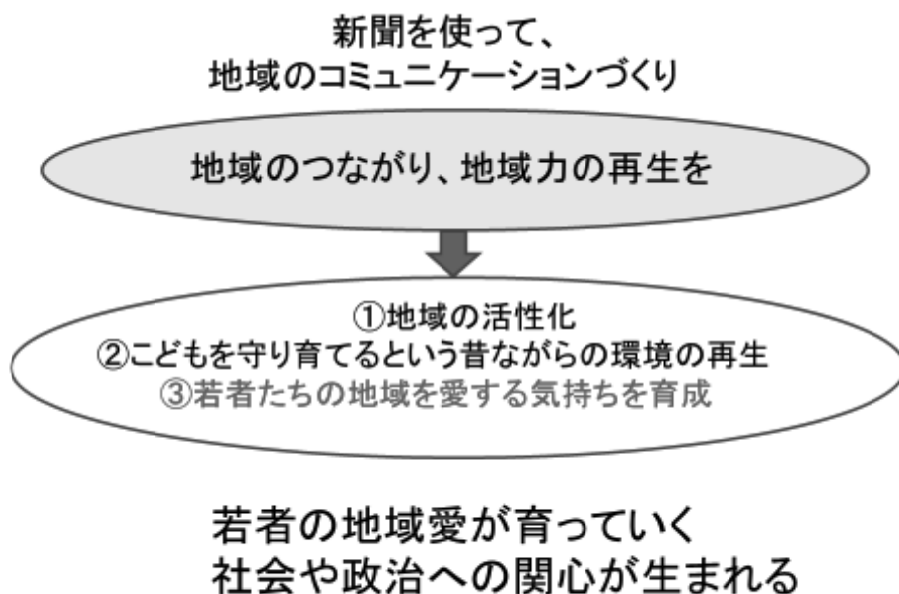
明るい選挙推進協会発行 広報誌298号「私たちの広場」に「NIEで地域力の再生を」と題して誌上発表。これが反響を呼び、明推協主催の「地域NIE研修会」や「地域リーダー養成講座」が北海道、東北、関東などを中心に毎年継続して行われるようになった。



2008年3月5日 明るい選挙推進協会中央研修会(東京 虎ノ門)
(全国都道府県から地域リーダー約200名参加)

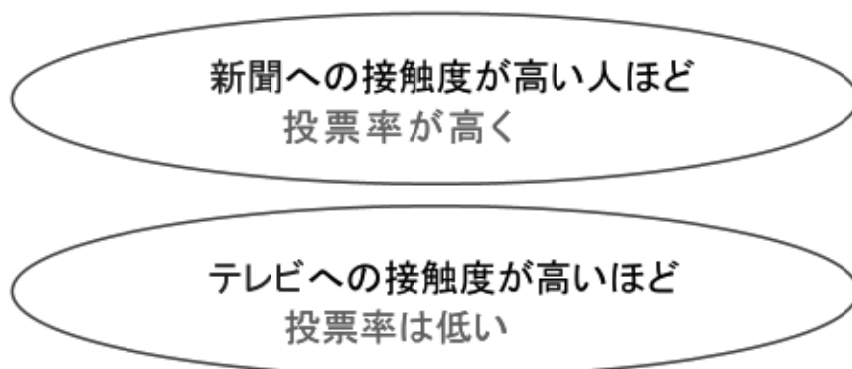
2008年～

明推協では、北海道、東北、関東地区を中心に、地域N I Eの手法を取り入れた「地域N I E研修会」や「地域リーダー養成講座」を毎年行っている。（以下の資料①～③は研修内容の一部）



資料①

選挙の投票参加 と 新聞への接触度



平成16年度7月東京都の意識調査(20代の若者対象)

資料②

コミュニティ再生のための **新聞を使ったワークショップ**

主役 は 参加者

仕掛け人 は
コミュニティリーダー

～ 地域NIEがその先に目指すもの ～
(シティズンシップ教育)

「新聞を通じて、地域社会に関心を高め、
民主主義社会の一員としての自覚を促す」

「新聞で、良き市民の育成」

資料③

2009年3月

日本新聞協会発行「新聞研究（692号）」に「NIEで向こう三軒両隣り」～地域NIEの取り組みから見えてきたもの～を誌上発表。

2010年7月

第15回NIE全国大会（熊本大会）にて「地域NIE」の実践発表並びに「新聞で喜怒哀楽を見つけよう」と題してワークショップ。

2011年7月

第16回NIE全国大会（青森大会）特別分科会で「震災と地域NIE」について発表。

2012年1月

地域NIEの新しいワークショップ「ことばの貯金箱」を提唱。
仮設住宅集会所からのスタート。（詳細は 本文7に記載）

2013年7月

NIE全国大会（静岡大会）にて、先生方向けの「ことばの貯金箱」のセミナーとワークショップ。

2013年9月

「東北大学スマートエイジングカレッジ 校長 川島隆太(東北大学教授)」に招かれ、地域NIEセミナーと「ことばの貯金箱」のワークショップを実施。

2014年3月

地域で活動する「ことばの貯金箱ファシリテーター」4名誕生。
(2014年現在6名)

2014年4月

地域活動の拠点として「ことばの貯金箱ハウス」開設
地域の空き家を利用。同時に「ことばの貯金箱 教室」を始める。
4月26日の第1回目は、地域の子供たちや大人が約数十名参加。以後、定期的に開催している。

5 地域NIEワークショップの紹介

「新聞から喜怒哀楽を見つけよう！」から

震災前の地域NIEは「新聞から喜怒哀楽を見つけよう」「新聞からいい人を見つけ!」「新聞から光る言葉を見つけよう」「コラムを声に出して読んでみよう」「社説の読み比べ」など、様々なワークショップを行ってきた。それなりに、参加者には喜んでもらっていた。

例えば、「新聞から喜怒哀楽を見つけよう」では、新聞丸ごとから読んで喜怒哀楽を感じた記事を一つ選び、それをはさみで切り抜きワークシート(資料④)に貼り、自分の感想をその下に書いて、それをもとにみんなの前で発表し合うというものだ。選ぶ記事は人それぞれで良い。

読んで「喜び」を感じた、「怒り」を感じた、「哀しみ」を感じた、「楽しい」気持ちになった記事を新聞から拾っていく。ワークシートには、感想をまとめて記入する前に、喜怒哀楽のその思いを「まずは仙台弁で一言どうぞ」というのがある。ここで、異世代間交流のきっかけに、なんと仙台弁が大活躍することとなる。

「うれしい」は仙台弁では何と仰うのですか」「腹が立つことを仙台弁では?・・・」子どもたちから次々と出てくる質問に「それはね、『ごしゃぐっ』というんだよ。」などと喜々として説明している大人たちがそこにいる。

仙台弁でひとしきり場は和み、いよいよ盛り上がっていく。仙台弁が異世代間の架け橋となり、教え教わる場面がそこに生まれるのである。

話題はいつしか新聞記事の内容に発展していくが、和気藹々の中で話がどん

どん弾んでいく。ここも異世代間の貴重な交流場面である。休憩時間の後は、参加者全員が一人ずつ前に出て「選んだ記事」と「感想」を発表し合い意見交換がなされる。

これまでに、参加者からは「地域のお年寄りとお話してとてもうれしかった」「普段地域の子供たちとお話する機会はめったにない。すごく幸せだった。」「このような講座はこれからも続けてほしい。また来たい、今度は友達も連れて来る。」などの感想が寄せられている。


次の写真は2010年仙台市立生出中学校で行われた「新聞から喜怒哀楽を見つけよう」のワークショップに参加した100歳になるお年寄りと中学生の写真である。おばあちゃんは新聞記事をきっかけに、自分の小さい頃のことや趣味の話を、中学生は部活や勉強のことなどを、静かに語りあいながら新聞を一緒に読んでいる。お年寄りに向けられた男子中学生の優しいまなざしがとても印象的だった。まさに、新聞が異世代をつないだ地域NIEだからこそ「奇跡の一枚」と言っても過言ではないだろう。

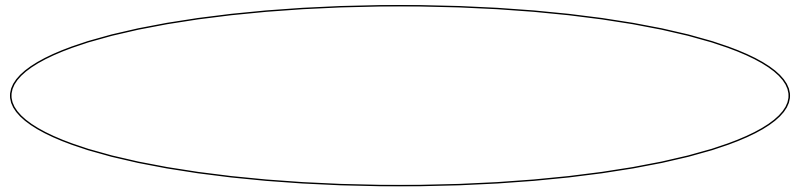
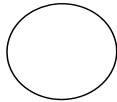


地域NIE「異世代をつなぐ」

100歳になるお年寄りに寄り添う中学生

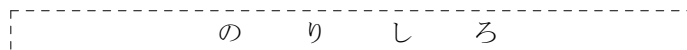
新聞から喜・怒・哀・楽をみつけ！

- 1 読んで興味を持った記事を切り抜いて、下の「のりしろ」に貼ってください。
- 2 記事にはどんなことが書かれていましたか。簡単に内容を書きましょう。
- 3 あなたは、その記事を読んで「喜・怒・哀・楽」の何を感じましたか。(○の中に書く) 次にその気持ちを、まずは仙台弁で一言どうぞ！( の中に書く)



- 4 では、読んだ感想も入れながら、その気持ちをもう少し詳しく書いてみましょう。

新聞名 () 日付 (年 月 日)

 の り し ろ

「新聞から喜・怒・哀・楽を見つけよう！」のワークシート (資料④)

6 震災を通して見えてきた「地域NIE」のあり方

「地域NIE巡回講座」は、地域の公民館、お寺、高齢者施設など、様々な場所で展開してきた。先にも述べたが、「地域力の再生」と「異世代間交流」を主なねらいとして行ってきて、依頼件数も年々増えていった。しかし、有志が集まったの活動範囲には限界があった。広めるためには圧倒的に人手が足りない。「地域NIE巡回講座」を本格的に進めて行くには、いわゆる「地域NIEファシリテーター」の養成が必要だった。そのための経費はどうか。そんな課題を抱えつつ、「行政の協力も得ながらの『地域NIEファシリテーター』を養成するために、まずはできることからやってみよう！」と、仙台市の教育委員会などへ働きかけたのが、2010年の4月ごろだった。「大変すばらしい取り組みだ。前向きに検討してみる」の回答を得ながらも、その後の具体的な反応がないままに、かといって、こちらとしても再度の行動も起せないままに月日は流れていた。そんな中、NIE活動に尽力されてきた先輩方との中で「地域NIEの進行役（地域NIEファシリテーター）の育成」等の話し合いが持たれたのだった。忘れもしない、2011年3月8日のことだった。

そして、「『地域NIEファシリテーター育成』を宮城から発信！」の夢を掲げて計画を練り始めたのだったが、なんとその矢先に、あの3.11が起きてしまった。もちろん、仙台市内の公民館等の機能はほとんど停止してしまっただ。再開のめども立たない状況の中、今までの活動はおろか、温め始めた宮城発の計画そのものも棚上げになってしまったのである。これからという時に、出鼻をくじかれた思いだったことは言うまでもない。

震災から1年後、やっと地域の施設は徐々に使えるようになったものの、その後の「巡回講座」の要請はうそのように減ってしまった。当然のことだろうと理解はしたが、反面、「こんな時だからこそ『地域NIE』の出番ではないのか。なんとか、役に立てないものか・・・」と、歯がゆい思いでいた。そして、悩み、考えた。

「地域NIE巡回講座」では、地域でも学校現場でも、確かにそれなりに評価は頂いてきた。しかし、これには、正直、様々な反省点もあった。特に地域で行う場合だが、「読むことが苦痛、面倒」という人（中でもお年寄り）が結構いたということだ。ましてや、「感想を書いて発表する」ということは、（得意な人は別として）、「難しい」「こういうことなら来るんじゃないか」などの意見も、なかったわけではない。

地域NIEは、誰もが気楽に参加できて、難しくなく、楽しく取り組めるものでなければならなかったはずなのに、そこに十分な配慮ができていなかったのである。そんなことから、「大人も子どもも、もっと簡単に組み合わせて、楽しく飽きずに取り組めるものはないか・・・。しかも、単発で終わりではなく、

継続して取り組めるワークショップはないか・・・。」「今までのようなワークショップの内容では、何か足りない・・・。」、そんなことに薄々気づいていたのも確かだった。そして震災をきっかけに、こんな時だからこそ喜ばれる何かがあるはずだ・・・と、真剣に悩み続けた先に見えて来たのが、「難しくなく、もっと易しいNIEを」「辛くなく、もっと楽しいNIEを」ということだった。「誰でもが楽しめて、夢中になれることを！」、そこで生まれたのがこの「ことばの貯金箱」だった。ワークショップは震災の翌年、ある仮設住宅内の集会所から始まった。

7 めっちゃ楽しい！「ことばの貯金箱」とは

さてさて、この「ことばの貯金箱」だが、「好きなことばをいっぱいためて、『ことばの億万長者』になろう！」というキャッチフレーズで始まる。そもそもは、東日本大震災の翌年に、仮設住宅内集会所からスタートした。その後、小学校や中学校の授業で取り上げられるようになって、今、学校や地域に全国的にじわじわと広がっている。福島から避難していた女性は「時間を忘れるほ



ど夢中になった」「自分の心が整理されてスッキリした」と、学校の子どもたちからは「めっちゃ楽しい」「いつの間にか記事を読んでいた」と、好評である。

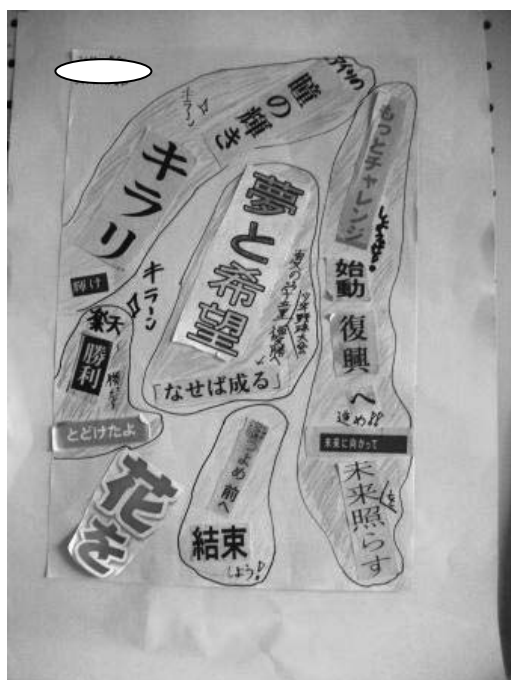
新聞の見出しや広告には、「この言葉いいなあ」というのが結構ある。しかし、それらは読み終わってしまえばそのまま古紙回収に消えてしまう。考えて

みればもったいない話だ。ならばいつそのこと、切り取って箱の中にためておこう。もちろん、ためっぱなしではつまらない。たまった言葉を紙に貼り、それを手掛かりに自分の思いを書いてみるもよし。語彙は増えていくだろうし、言葉のセンスも磨かれる。一つひとつの言葉との出合いで言語活動は大きく広がっていく。何より言葉を通して自分と向き合うことができればこんなに素晴らしいことはない。「そうだ、その箱は『ことばの貯金箱』としよう！」

こんなことから始めたのが「ことばの貯金箱」である。

まずは、古新聞（広告なども）でいい。好きな言葉を切り抜いていくが、もちろん記事や写真、漫画などでもOKだ。切り取ったら、「ことばの貯金箱」（中が見える透明の瓶やボックスが最適）に入れていくのだが、ただ黙って入れても面白くない。ここは、遊び心を込めて大きい声で「チャリーン！」と元気よく、「チャリーン！」「チャリーン！」が合い言葉だ。さて、いっぱい貯まったところで、次は、好きな言葉を色画用紙の上に貼ってみる。いくつでも好きなだけ自由に楽しみながら貼っていく。でも、貼るだけではなんだか物足りない。そんな時は、そこに言葉を紡いでみる。吹き出しをつけて、今どきのツイッターのように、自分の気持ちを自由につぶやいてみる。

仮設住宅内 Kさんの作品



仙台市立小学校5年生の作品

好きな写真やイラストを加えたり、詩や川柳、短歌を添えたりするのも、これまた何とも楽しい。何がダメという縛りは一切ない。ひとつの言葉をきっかけにして、思いのままに自分を表現していき、最後は、出来上がった作品をみんなで見せ合う。会話が弾みコミュニケーションがどんどん広がっていく中で、不思議なことにいつしか自分の心が解放されていくのが分かる。

「新聞から好きな言葉を切り取って、貼って、ついでにそこに一人言を添えてみる」という実にシンプルな内容なのだが、これが「子どもから大人まで誰もが気軽に楽しめる」と、広く受け入れられている。

しかも、自分との向き合いができるという側面もあり、思ったより奥が深い。ことばを貼り付ける台紙にも、つい夢中にさせる仕掛けも取り入れた。

それは「今日一番心に残ったことばは？」「今日の作品は星いくつ？」を書き入れる箇所を設けたことだ。発表が苦手な子どもは、このコーナーがあることで発表のきっかけが掴みやすく、「苦手意識の克服」にも繋がっている。これは、大人の場合も同じことがいえる。

仮設住宅に住む人たちからは「心が整理されてスッキリした」「楽しくてやめられない」と感想が寄せられた。親子のワークショップに参加したある母親は「是非、この手法を勉強したい。自分たちのサークルやPTA行事でやってみたい」と語ってくれた。「難しくなく易しいNIEを！辛くなく楽しいNIEを！」、そうでなければ広がらない…。地域NIEの奥義なるものが、「ことばの貯金箱」を通してやっと見えてきたように思う。

ことばの億万長者になろう！

- ① 捨ててしまうには、もったいない「ことば」を新聞から切り抜きましょう
(ことばを見つける)
 - ・心がワクワクすることば
 - ・大切にしたいことば
 - ・心にジーンとひびいたことば・・・などなど
 - ・写真でもいいですよ
- ② 「ことばの貯金箱」に入れておきましょう。
注：入れる時は大きい声で「チャリーン！」の合い言葉を忘れずにね(笑)
(ことばを集める)
- ③ 自由に楽しみながら、台紙に貼っていきましょう。
(ことばを楽しむ)
- ④ ことばをながめながら、吹き出しに「ひとりごと」を書いてみましょう。
(ことばを紡ぐ)
- ⑤ できあがりしました！がんばったね！うれしいね！
作品をみんなに紹介しましょう。
(ことばを伝え合う)

8 地域N I Eの拠点「ことばの貯金箱ハウス」オープン！ そして、ファシリテーター誕生！

今年（2014年）4月、地域の空き家を利用し、地域N I Eの拠点として、「ことばの貯金箱ハウス」を立ち上げた。そこで「ことばの貯金箱 教室」を開催している。地域の子どもたちと大人がやってくるが、おかげさまで毎回盛況だ。（「ことばの貯金箱 夢 プロジェクト」のブログで紹介）



ことばの貯金箱教室「寺っこ屋」看板（スタッフの工藤さんの書）

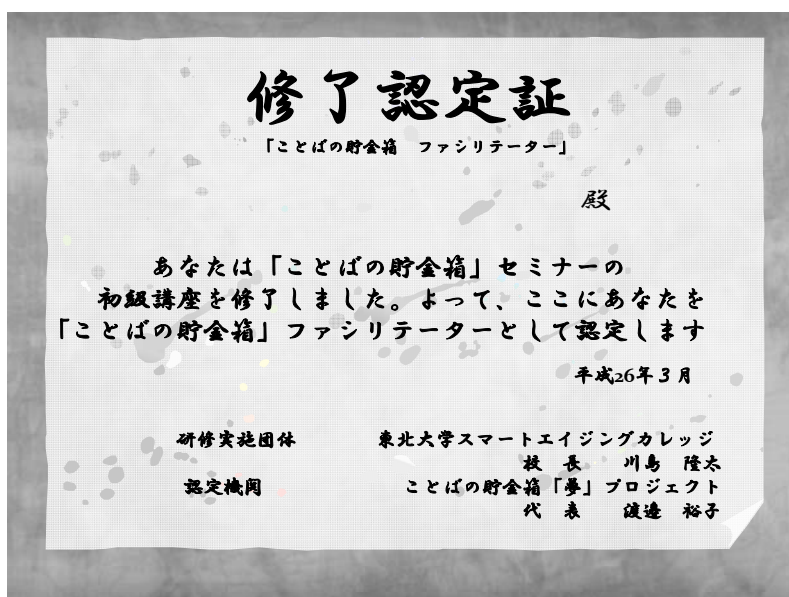


ことばの貯金箱教室「寺っこ屋」オープン2014/04/26（親子約数十名参加）



2階の3部屋に分かれてのワークショップ（中央はファシリテーター大竹さん）

昨年から「ファシリテーター」の養成講座を開設してきたが、今年度になって、初めて6人の地域NIE進行役（ことばの貯金箱ファシリテーターと命名）が誕生した。いずれも初級コースを修了した受講生に「初級ファシリテーター」としての資格が与えられた。（コース別講義内容は資料⑤を参照）



修了認定証

今、まさに活動が始まったばかりだが、全員やる気満々だ。「ことばの貯金箱ハウス」での活動はもちろんだが、それぞれがさらなる活動の場を広げるために独自に企画し、地域の中へどんどん飛び込んでいる。おかげさまで、地域からのオファーも徐々に来ており、これからの活躍が期待される。



2014年7月 県北栗原市「みやぎくりはら遊びクラブ」からの初要請で
佐藤さんと渋谷さんがファシリテーターとしてデビュー！

参加者の感想

- * 新聞にこんないい言葉があるなんて意外！すごく、めちゃめちゃすげー楽しかったです。自分なりのアレンジ、楽しかったです。
- * 最初は何？って、とまどったけど、だんだん楽しくなって、またやりたいなと思いました。
- * 新聞は、いろんなことができる。すごい。
- * 新聞からことばを見つけて、切ったりはったりして本当に楽しかった。またやりたいです。
- * ぼくは新聞に色々ないいことが書かれているなんて気づかなかったので、ことばの貯金箱をしてよかったです。

「ことばの貯金箱教室」開催のチラシ

こんな希望をかなえてくれるのが「ことばの貯金箱」だよ！

- ・みんなの前で、堂々と話せるようになりたいな
- ・自分の気持ちを、きちんと伝えられるようになりたいな
- ・色々な「ことば」と出会って、それを使えるようになりたいな

「ことばの貯金箱 教室」

新聞から見つけたことばを「チャリーン」って、
貯金箱に入れていくよ。

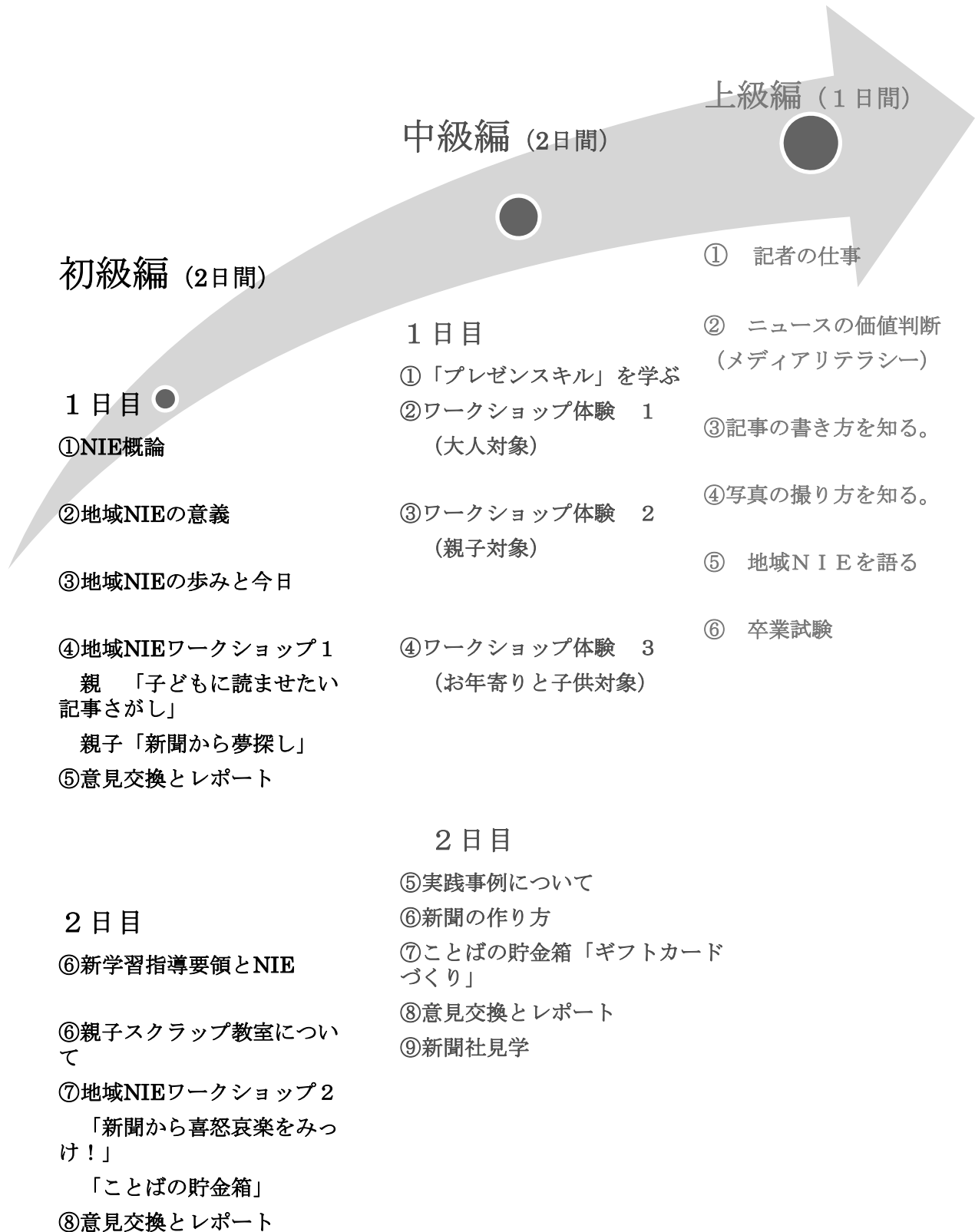
貯まったら紙に貼っていくよ。

最後はみんなで見せ合いっこだよ。



日	時	平成 26 年 11 月 15 日 (土)
		午後 1 時～午後 3 時
場	所	ことばの貯金箱ハウス「寺っこ屋」 住所 泉区寺岡 丁目(白いおうち)
内	容	1. ことばの貯金箱ワークショップ 2. お楽しみ会 (むかしばなし)
持	ち	物 はさみ、のり、筆記用具
申し込み先	FAX	()
(参加者名・住所・氏名・お電話番号をご記入ください)		

協 力 仙台市立 小学校
東北大学加齢医学研究所 (川島隆太研究室)
河北新報社教育プロジェクト事務局
主 催 ことばの貯金箱「夢」プロジェクト



(資料⑤)

9 おわりに

子どもたちは「めっちゃ楽しい」「言葉を探しているうちに気づいたら記事を読んでいた」「自分の思ったことが書いて想像がどんどんふくらんでいった」「面白くて時間が立つのを忘れていた」「なんだか気持ちがすっきりした」と、感想を書いてくれた。先生たちからは「並べられた言葉から子どもの興味関心や心の動きが分かる」「生徒同士が言葉をきっかけに話題を広げている」「普段勉強に集中できなかった子も夢中になって取り組んでいた」、保護者からは「子どもとの話題が増えた。子どもがどういうことを考えているのかが、選んだ言葉から見えてくる」などと寄せられた。

ことばの貯金箱」で出会った子どもたちは、いつしかみんな笑顔になっていく。子どもたちと接する中で、「静かに自分と向き合えるこのような時間が、とても大切な時間だったのではなかったか」と、改めて気づかされた。

地域N I Eで、大人とこどもが一緒になって、「チャリーン、チャリーン！」の合い言葉が日本中にこだまして行ったら、みんながきっと笑顔になれる…。そうすれば、もっともっと温かい地域のつながりが生まれるはず…。そんなふうに思う。

「ことばの貯金箱」のもう一つのキャッチフレーズに「ことばは人を傷つけるためにあるのではなく、人を幸せにするためにあるんだと思う…」がある。

「ことばの貯金箱」を通して、このメッセージが、日本中の子どもたちに、そして大人たちに届くことを願ってやまない。



仙台市立中野栄小学校6年生（平成26年6月10日）

～校長先生からのお手紙から～

「教育実習生の日記に『みるみる子どもたちが引き込まれのめり込んでいく様子に驚きました』と書いてありました。」

地域N I E（新聞講座）の実践プログラムについて

—地域N I E 指導者養成講座と市民講座—

前日本新聞協会N I Eコーディネーター
赤池 幹（元毎日新聞記者）

1 はじめに

学習指導要領に新聞が指導事項として多くの教科で明記されたことで、N I Eはさらなる飛躍を期す第2ステージに立った。第2ステージの目標が学校教育の中での新聞活用の定着・発展であることは言うまでもないが、その実現のための環境づくりが一層重要になっている。その具体化が「地域N I E」である。公民館や地区センター、図書館などを場とする生涯学習や親子学習が各地で盛んに展開されている。その中にN I Eを導入することで、新聞を挟んで地域住民の絆の再生、地域と学校の連携に貢献し、N I Eへの理解を広げたい。その取り組みが学校でのN I Eを推進しやすい環境づくりにつながる。地域N I E指導者養成講座は、地域N I Eの主体となる人材を育成するために、新聞協会と推進協議会が連携して実施するプロジェクトである。すでに、地域N I Eを実践している事例や、公民館や図書館、生涯学習担当者等に提案しているN I E実践者もあり、協会、推進協議会の取り組みとすることで活動の広がりを追求したい。

以下は、2010年に地域N I Eを実践している影山清四郎・前日本N I E学会会長（横浜国大名誉教授）、吉成勝好・現日本新聞協会NIEコーディネーター（元全国新聞教育研究協議会会長）、渡邊裕子・N I E教育コンサルタントと協議したNIEのリーダー育成の企画概要（案）である。しかし、この企画は日本新聞協会加盟の新聞社で構成するNIE専門部会で推進が了承されたものの、具体化されないまま現在に至っている。再度協議のテーブルに載せて、内容と具体化へのプログラムを検討する価値があると考え。こうした研修会はアドバイザーに活躍の場を提供することにもつながるだろう。

2 地域N I E 指導者養成講座の概要

(1) 講習回数

計3回実施（各6時間程度）

1回目＝講習Ⅰ、2回目＝講習Ⅱ

～以上2回受講者に「地域N I E指導者」の受講認定証を授与

3回目＝上級編（希望と実現可能性で実施判断）

～新聞社見学を含め新聞社or新聞博物館で研修

- (2) 対象＝自治体の生涯学習担当職員、図書館・公民館などの職員、教員・新聞記者OB、各種学習サークルのリーダー、企業の職員研修担当者、その他新聞教育に関心のある一般
- (3) 募集＝新聞、自治体広報誌、図書館・公民館の機関誌などを活用
＝自治体担当者などへの直接的な働きかけが望ましい
- (4) 資料＝協会が雛形をつくり、それを基に協議会が地域に則して作成
- (5) 認定＝日本新聞協会、N I E推進協議会の連名

◆認定者の内規

- ・役割＝①生涯学習、親子学習など各種学習で新聞を活用した活動を行う
②地域と学校との連携した活動の推進
- ・特典＝名詞の肩書きに「〇〇地区N I E指導者」の使用ができる
＝新聞協会や各N I E推進協議会が行うセミナーなどの行事への参加
＝N I E全国大会の参加費免除、同大会で実践報告・公開講座が可能
＝N I EニュースなどN I E情報の提供
＝日本新聞博物館への無料入場
- ・取り消し＝N I Eの営利目的で利用した場合
＝新聞社、新聞への誹謗・中傷をした場合
＝活動実態が認められない場合

◆地域N I E指導者養成講座プログラム（例）

○1回目＝講習Ⅰ（10：30～17：00）

時間	テーマ
① 10：30～11：15	今なぜ新聞か～地域N I Eの意義
② 11：15～12：00	新聞が届くまで 〈昼食〉
③ 13：00～13：45	地域活動の事例紹介
④ 13：50～15：50	ワークショップ
⑥ 16：00～17：00	意見交換「私と新聞」

○2回目＝講習Ⅱ（10：30～17：00）

時間	テーマ
①10：30～11：15	1分間スピーチ（前回予告）
②11：15～12：00	見出し読み比べ 〈昼食〉
③13：00～15：00	新聞作りに挑戦
④15：15～16：00	新聞発表会
⑤16：00～17：00	交流・懇親

○3回目＝講習Ⅲ（希望者：13：00～17：00）

（会場・新聞社or新聞博物館）

時間	テーマ
①13：00～13：45	ニュースとは・記者の仕事
②13：45～14：30	価値判断と見出し
③14：45～15：45	新聞社見学
④16：00～17：00	写真の撮り方

3 地域NIEの実践プログラム例

（1）品川シルバー大学の例

当講座は、筆者が毎日新聞社在勤時から受け持っており（今回で3回目）、大学は、60歳以上の区内在住者が対象で、総定員は約400人である。ここでは、体系的な学びの場「ふれあいアカデミー」（3年制）と、初心者向けの楽しく豊かな学びの場「うるおい塾」（1年制）で構成。「ふれあいアカデミー」は単位制で、「ふれあいコース」（1年目）で、通年で20単位を取得したあと、「いきいきコース」（2・3年目）に進級し、2年間で40単位を取得する。このほか「うるおい塾」や、区主催等の講座、講演などに参加し20単位を取得し3年間で、80単位を得て卒業となる。

筆者は「いきいきコース」後期の「現代社会」を担当している。今回は、前回同様『「多メディア社会を生きる」～新聞そしてメディアリテラシー』をテーマに計10回の講座を受け持った。これまでに「新聞に見る戦後史」「東日本大震災を考える」などを行った。



① タイトル 「多メディア社会を生きる」 —新聞そしてメディアリテラシー

② シラバス (2部構成)

第一部＝メディアを知ろう。考えよう

1回目＝情報とは何か～人類の歴史と情報

樹上生物だった人類がなぜ現在のような発展を遂げたのか、情報の歴史の中で考える

2回目＝メディアの役割と社会的責任

新聞、ラジオ、テレビ、ネット、雑誌など情報媒体の特性を知り役割と責任を考える

*この1週間～気になるニュース・私の意見 (参加者5人1分間スピーチ)

3回目＝新聞をとことん知ろう

紙面構成や情報の価値判断は？ 比較読みをしよう

*この1週間～気になるニュース・私の意見 (参加者5人1分間スピーチ)

4回目＝デジタル社会と新聞を考える

デジタルメディアの浸透で何が起きているか、ネット依存と小児科学会の警告

*この1週間～気になるニュース・私の意見 (参加者5人1分間スピーチ)

第二部＝あなたは新聞記者

5回目＝グループ新聞を作ろう①＝見出しで遊べば見えてくる

*この1週間～気になるニュース・私の意見（参加者5人1分間スピーチ）

*見出しのつけ方

6回目＝グループ新聞を作ろう②＝題字（新聞のタイトル）と役割分担決定

*レイアウトの仕方、記事の書き方、写真の撮り方

*この1週間～気になるニュース・私の意見（参加者5人1分間スピーチ）

7回目＝新聞社（または新聞博物館）を見学しよう

8回目＝グループ新聞を作ろう③＝記事の校正・レイアウト決定・台紙に仮張り

*この1週間～気になるニュース・私の意見（参加者5人1分間スピーチ）

9回目＝新聞を完成させよう

*この1週間～気になるニュース・私の意見（参加者5人1分間スピーチ）

10回目＝作った新聞の合評とディスカッション

《品川区で使った資料》現代社会1回目

【メディアを知ろう・考えよう】

*用語

- ・メディア→情報を伝える媒体・手段
- ・マスメディア→多くの人を対象に一挙に情報を伝える媒体
＝新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、映画、インターネットなど
- ・コミュニケーション→情報をやり取りする行為
- ・マスコミュニケーション
→コミュニケーションを大量・同時的に行うこと

*情報と社会形成

- ・地球の誕生＝約46億年前
- ・霊長類の出現＝6500万年
- ・チンパンジーとの共通祖先からヒトが分かれて500万年（200万年からコミュニケーション、100万年前から共同生活）＝6000万年をチンパンジーとヒトは共有

○チンパンジーとヒトの違い（京大霊長類研究所）

ゲノムの違いはわずか1.5% 《genome=gen(遺伝子) +ome(集合=生物の遺伝子の全体)》

最大の違いは「言語」=象徴的な記号体系=の有無

・樹上→地上—「森を選んだチンパンジー」「草原を選んだヒト」

A、食料の変化→動物性タンパク質の摂取=**大脳の発達**

B、外敵の存在→固体の脆弱なヒト→共同防衛（種の保存）の必要性

C、**二足歩行**→遠くまで見通ことが可能→外敵や食糧の在りかがキャッチしやすく→相互の伝達=種の保存のための**社会（共同体）の成立**=分業と協業。情報によって成り立つ共同体=コミュニケーションなくしてヒトは社会を作れず、社会なくしてヒトは生存できない。

*情報の価値

正確性 高速性 タイムリー性 即応性 遠隔性 大容量性

→人間はそのような情報社会を追求してきた

*情報伝達=メディアの歴史（音声、映像、文字で成り立つ）

・言語以前=直接表現メディア

危険や食糧の在り処を知らせるために石を投げる、叫ぶ、身振り手振り、狼煙、太鼓=こうしたコミュニケーションの時代が数十万年続く

・言語の獲得=代行表現メディア

中枢神経の発達で「音声」「映像」「文字」を組み合わせたコミュニケーションが始まってわずか数千年（抽象的な事象を情報として記号化して伝達）

語り継ぎによる伝承→内容の変質

絵文字、象形文字→文字へ進化

B C 3000 年=粘土版、パピルス（paperの語源）、羊皮紙の使用

B C 1400 年=金石、木簡・竹簡

B C 前後=紙の発明

～ローマ時代（B C 2 世紀ごろ）は複数の人手で書き写していた

*情報革命～活字メディア

○**新聞**

15 世紀半ば=ドイツの金細工職人**グーテンベルグ**がブドウの絞り機をヒントに、紙に版をプレスする**活版印刷**を発明（世界三大発明の1つ=活版

印刷、火薬、羅針盤)

大量印刷が可能に→ (一部の特権階級独占から) 情報の流通・一般化が可能に→ 1456年「**42行聖書**」180部を印刷した→キリスト教の世界的布教=新聞、出版が盛んになり知識や情報が大量に蓄積、頒布される情報時代の先駆け

・**日本**=幕末の動乱、文明開化、戊辰戦争を契機に相次いで発行。福沢諭吉、大隈重信、黒岩涙香、徳富蘇峰、秋山定輔(二六新報)ら知識人、自由民権活動家たちが刊行。

1871年(明治4年)=日本最初の日刊紙「横浜毎日新聞」刊行

1872年=東京で初の日刊新聞「東京日日新聞」(今の毎日新聞)、読売新聞(1874年)、朝日新聞(1879年)創刊。

「錦絵新聞」出回る(浮世絵師参入。今の写真週刊誌の役割)

○雑誌

1867年(慶応3年)=「西洋雑誌」(柳河春三発行)が最初。雑誌文化が確立したのは日露戦争後。中央公論(1887=明治20年)、青鞥(1911=明治44年、平塚らいてう)、講談倶楽部(1912年、講談社・野間清治)、少年倶楽部(1914年)、婦人公論(1916年)、主婦之友(1917年)、週刊朝日・サンデー毎日(1922年)、文藝春秋(1923年、菊池寛)

*映画・ラジオ・テレビ・インターネット

電信技術の発達=手旗信号やモールス信号(1837年)→言葉の記号化→通信技術の革新=ベルの電話(1876年)、エジソンの電気(1883年)、ヘルツの無線実験(1894年)=タイタニック遭難を無線通信(1912年)

1893年=エジソンが映写機→日本で1896年公開=レコードも初輸入

1898年=日本映画第1作(無声映画→トーキーへ)

1920年(昭和9年)=アメリカでラジオの放送(ドイツのブラウン1897年ブラウン管発明)=**日本では1925年**(1972年100万台突破、1936年ベルリン五輪260万台=前畑頑張れ!)

1925年(大正14年)=**アメリカでテレビ放送開始** =**日本では1953年、カラーテレビ** は**1960年**(1964年東京オリンピック)

○インターネット

1961年=アメリカ・ユタ州でテロにより、3ヶ所の電話中継基地が爆破され、軍用回線が一時的に停止。国防総省は核戦争時に電話回線が役立たなくなる事態を恐れ、新たな通信システムの研究を開始。データを小包(パ

ケット) 化して中継基地を迂回させることで一ヶ所に依存しない仕組みを開発。

1969年= 4 大学で 24時間接続したままのネットワークの試験運用開始。

1990年=商用プロバイダができ民間利用が始まる。

1992年= 「情報ハイウエー構想」

日本では 1984 年=慶応大、東工大、東大で実験的ネットワーク

1992年=大手企業や通信・コンピューター関連会社が接続

1994年=企業、個人会員向けにネット接続サービス開始

***マスコミ 5 媒体の時代** (新聞・雑誌・ラジオ・テレビ・インターネット)

・**新聞**= (新聞協会加盟)

105社、 48, 345304部、 一世帯当たり0.9部、 従業員45,964人

*人口1000人当たりの各国部数

香港614、スイス549、ノルウェー538、スウェーデン514、

フィンランド487、クウェート484、日本459、

(アメリカ201、韓国397、イギリス332、ドイツ278、

ブラジル62)

・**雑誌**=約3, 500点 (毎年約150点が創刊、100点前後が廃刊)

・**ラジオ**=AM47社、短波1社、FM53社。普及台数約2億台 (カーラジオ含む)。週5分以上ラジオを聴く人70%以上

・**テレビ**=地上波テレビ局129社 (NHK+民放115+UHF局13) 世帯普及率ほぼ100%、1日平均視聴時間約3時間

・**インターネット**=利用者数9462万人、人口普及率78%。インターネットを利用する際の端末は携帯電話7878万人、パソコン8706万人。

携帯電話=1億2821万台 (日本人口1億2805万人)、普及率101.1%、

スマートフォン携帯電話の2台所有7%。パソコン=普及率77%

*世界のインターネット利用者22億7000万人 (世界人口71億人)

○利用内容

①メール ②各種ホームページ閲覧 ③物品購入など商取引

④ブログ・フェイスブックの閲覧 ⑤地図情報の検索

⑥音楽・映像・ゲームソフトの入手 ⑦オークション ⑧チャット

***ソーシャルネットワーキング活動を主目的とする割合は日本36%、アメリカ55%、イギリス57%、ドイツ45%、ブラジル82% (5カ国調査)**

*加入電話3595万台 (前年度比9%減少)

***各メディアの印象** (新聞通信調査会・2010年・単位%)

	新聞	NHKT	民放TV	ネット	ラジオ	雑誌
欠かせない情報源	56.0	47.6	50.0	34.1	12.9	7.9
情報が役に立つ	54.7	45.4	47.0	32.7	12.1	12.6
情報量が多い	44.6	28.5	39.8	35.2	5.4	7.5
社会的影響力がある	56.7	61.5	57.3	30.8	10.1	8.4
楽しい・面白い	20.3	19.1	69.7	31.9	12.7	23.8
情報が分かり易い	42.8	48.7	56.2	22.1	10.2	6.4
信頼度	72.0	73.5	65.3	58.0	61.5	47.1

***新聞を読む理由**

読むのが習慣になっている	55.3%
世間の動きが分かる	46.8%
好きなききに読める	45.0%
生活や仕事に役に立つ	35.9%
様々な情報が網羅されている	30.2%

***新聞でよく読む記事**

テレビ、ラジオ欄92.1%	地元に関する記事91.1%
社会に関する記事90.0%	政治に関する記事89.2%
スポーツ・芸能記事88.5%	生活・健康記事86.6%
文化に関する記事82.0%	国際関係記事81.8%
社説67.8%	

***事件・事故のニュースの入手先**

民放テレビ73.7%	新聞65.2%	NHKテレビ64.5%
ネット (パソコン) 27.6%	ネット (携帯) 16.6%	
ラジオ (民放) 13.0%	ラジオ (NHK) 8.4%	

《品川区で使った資料》現代社会2回目

「メディアの社会的役割と責任」

○メディアの役割

- ・公正で正確な情報＝社会理解のための基礎情報の提供
- ・論評と解説＝ニュースや話題を社会的、歴史的脈絡で論評して展望を示す
- ・発掘・調査＝隠された事実を掘り起こし、不公正を質して公益に寄与（ジャーナリズム）
- ・議論の場＝直接出会うことがない人々の意見交換の場提供（フォーラム）
- ・多様な見解＝一定のテーマについて識者の意見など視点の違う見解の提示
- ・キャンペーン＝環境、福祉、ボランティア、事故防止、災害非難、募金
- ・文化貢献＝絵画展、コンクール、書籍紹介など文化情報と事業展開
- ・生活情報＝子育て、介護、医療、料理、ペットなど生活に役立つ情報
- ・健全娯楽＝各種スポーツ情報と事業、コンサートや映画情報…

○メディアの責任

メディアには世論形成、社会的な意思決定、人格形成、日常生活への影響力があり、そのことへの極めて大きい社会的責任がある

- ・責任の自覚と責任能力の有無
- ・意図的に情報を発信する行為を自己評価、コントロールできる能力の有無
- ・国民の知る権利に応える前提となる言論・表現の自由を確保するための自主的な研究と自制、政治の統制を排除する意志の有無

＝最終的な責任は「発信する情報が全体として社会の進展、健全な民主主義の発展、受け取る人の幸福な生活に貢献しているかどうか」で判断される

○メディアリテラシー

- ・メディアにアクセスし、情報を批判的に読み取り、取捨選択しながら活用する能力
- ・「役割と責任」に各メディアを当てはめて考えると、メディアの特性がわかる

○メディアの特性

- *新聞 一覧性、信頼性、詳報性、解説性、記録性、検証性、改革性
- *テレビ 娯楽性、印象性（衝撃性・感動性）、同時性
- *ネット 無尽蔵性、双方向性（参加性・発散性）、多機能性、スピード性

(2) 横須賀市民大学の例

ここでは、影山清四郎・前N I E 学会会長（横浜国大名誉教授）が、横須賀市生涯学習財団に提案して実現した地域学習の一貫で、今回で3回目。6回の講座は講義とワークショップで構成する参加型。終了後も新聞活用の自主講座を行い、理想的な発展をみせている。

- ・期間 平成26年9月4日（木）～10月9日（木）の毎週木曜日
- ・時間 13：00～15：00（休憩10分）
- ・形式 講義とワークショップ（講義60分、ワークショップ50分）
- ・人数 30名
- ・コーディネーター 影山清四郎・横浜国大名誉教授（前N I E 学会会長）

・講義内容と講師

① 9月4日（木）

赤池 幹（神奈川県・埼玉県N I E コーディネーター、元毎日新聞社記者）

テーマ「新聞についての基礎知識」

ワークショップ「私の新聞との付き合い方」

② 9月11日（木）

吉成勝好（日本新聞協会コーディネーター、元小学校長）

テーマ「教育と新聞」、ワークショップ「私の選んだ気になる記事」

③ 9月18日（木）

神奈川新聞横須賀支社長

テーマ「新聞ができるまで」、

ワークショップ「記事に見出しを付けてみよう」

④ 9月25日（木）

産経新聞社横浜総局長（前ワシントン支局特派員）

テーマ「特派員の仕事～海外ニュースとは」

ワークショップ「グループで切り抜き新聞を作ってみよう」

⑤ 10月2日（木）

毎日新聞社横浜支局長

テーマ「支局の仕事～地方版で重視していること」

ワークショップ「ハガキ新聞を作ってもよう」

⑥ 10月9日（木）

タウンニュース社（横須賀）編集長

テーマ「タウンニュースが目指しているもの」

ワークショップ「横須賀・三浦を元気にする切り抜き新聞を作ろう」

(3) 夏休み親子新聞教室の例

筆者が、神奈川県のアドバイザーの協力で、近所の地区センターに提案して実現した企画である。地区センター館長から歓迎され、反応次第で来年度もさらに発展させたいという意向がある。センター側は、品川や横須賀のような企画も期待しており、検討課題である。

・趣旨 携帯電話、スマートフォンが普及し子どもへの心身の悪影響が心配されています。ネット依存も社会問題になっています。一方、文部科学省の調査(2013年)で「新聞を読む子どもほど成績がよい」という結果が出ています。新しい学習指導要領によって、小・中学校の教科書には「新聞」の読み方や、記事の書き方、新聞作りが盛り込まれ、新聞記事を手がかりに、親子の会話がはずみ、子どもの社会への関心が高まることも証明されています。こうしたことから「N I E」(Newspaper In Education)が日本だけでなく世界に広がっています。夏休みに親子で新聞に親しむことで、子どもたちの健全な成長に役立てませんか。

・内容＝新聞でさがそう 新聞をつくろう

親子で新聞から①「喜怒哀楽」をさがして切り抜き、②模造紙に貼り、③それぞれに簡単な感想を書き入れる、④新聞の名前(タイトル)をつける⑤最後になぜその記事を選んだか、どんなことを思ったか発表し合う。

・実施案

① 場所 初音ヶ丘地区センター

② 日時 8月24日(日)10時～12時

③ 募集人員 親子10組20人。対象小学校3年生～中学生とその保護者

・道具 新聞＝20部。ハサミ＝各親子で一つ、糊＝各親子で一つ、マジック＝赤、黒、青各1本計3本を各親子。模造紙＝各親子に1枚と予備数枚。サイドボード(新聞は赤池が用意。ハサミ、糊は持参あるいはセンターが用意。マジック、模造紙はセンターが用意)

・講師 神奈川県N I Eアドバイザー

「新聞ヨム、社会ワカル、投票率カワル」

—情報を多面的にとらえ、自ら読み解く力を磨く—

熊本日日新聞社N I E専門委員

越地 真一郎

(熊本大学客員教授、熊本学園大学招聘教授)

この事例は、「新聞を読むことで社会への関心が高まり、投票率アップにもつながる」という視点での新聞活用を試みたものです。

選挙は民主主義の基盤をなすもので、総務省は「国や社会の問題を自分の問題としてとらえ、自ら考え、自ら判断し、行動する主権者をつくる」という主権者教育に力を入れています。いわば「社会参加の促進」や「政治的リテラシーの向上」を有権者に求めており、その手法の一つとして注目されているのが、新聞をテキストにした参加型学習です。

本稿は、総務省発行の「主権者教育のための成人用参加型学習教材」（平成25年度版）として作成したもので、同省では地域における研修会などでの活用を呼び掛けています。本稿は下記ホームページアドレスからダウンロードもできます。（http://www.soumu.go.jp/senkyo/senkyo_s/news/sonota/gakusyu/index.html）

手法として、クイズに挑む、メディアの特性を知る、見出しをつける、各紙を読み比べる・・・新聞をいろんな角度から見つめ、楽しく自由に語り合うことで、新しい世界を広げるという形式です。

1 教材の特徴とねらい「新聞を教材に」（N I Eという手法）

あふれる情報をどう取捨し、学びや暮らしにどう生かすか。情報爆発時代を生きる私たち一人ひとりにとって、切実な問題です。ここでは新聞を教材にして、①社会をみつめる力②考える力③表現する力への育成を目指します。それが「情報を多面的にとらえ、自らの視点で読み解く」というメディアリテラシーを育み、ひいては市民性の向上につながると考えるからです。

新聞を教材として活用する手法は、N I E (Newspaper in Education＝教育に新聞を)と呼ばれ、世界70カ国以上で展開されています。日本ではおよそ30年前から始まり、教育現場と新聞業界による推進組織が全都道府県に設置され、多彩な活動が展開されています。特に「全教科での言語活動の充実」を柱にした学習指導要領の実施に伴い、小中高校の教科書に新聞が幅広く登場するようにな

り、生きた学習材として注目が高まっています。

近年、NIEは児童生徒に限らず大学・専門学校、社会人、高齢者、家庭など幅広い層で実施され、効果を挙げています。体験者からは「社会への関心が高まった」「ものの見方が変わった」などの声が聞かれます。また、新聞を読む人ほど投票に対する意識が高いというデータもあり、主権者教育とも直結していると言えます。

2 学習の進め方、考え方

学習時の質問には大別して、①「正解がある(答えは1つしかない)」問題と、②「正解がない(答えはいろいろある)」問題の2種類があります。①は「ゴルフの石川遼の出身高校は」といった問いで、②は「氷が溶けたら何になる」といった問い掛けです。①は知らなければ答えようがありませんが、②は「水になる」のほか「春になる」という答えもあり得ます。つまり、②は知識を試すものではなく、考えれば何か生まれるという世界です。

新聞学習で行う学びは、②に近いものです。「(~について)知っていますか」というやり方ではなく、「(~について)どう思いますか」という問い掛けが基本となります。どう思うかは人によってそれぞれですから、「(~について)私はこう思う」と明確に言いさえすれば、それが答えになります。言い換えれば、学習の方針として受講者に「何かを教える」のではなく、その人が持っているものを「引き出す」という姿勢が大切になります。

一方、受講する側は「恥をかく」ことを恐れてはいけません。「これぐらいのことしか知らないと思われたくない」などと格好をつけたりすると、その場は何か切り抜けられても、自分の身にはつきません。今の自分をさらけ出すことが肝要です。そうすれば大方、恥をかくことになりますが、そこに勉強する意味があります。自分をさらけ出して、大いに恥をかく。それが、学ぶことです。

(1)準備する物

- ・新聞 (なるだけ複数紙を用意)
- ・切り抜き記事 (できれば日頃から留意してストックしておく。)
- ・ワークシート

(2)グループ分け 3～5人程度が理想的

3 展開・学習の手順

(1)ウォーミングアップ

新聞を身近に感じてもらうため、クイズでスタート

①題字は大事＝解説参照

新聞の表札ともいえる題字には、バックに図柄(地紋)が描かれているものが多くあります。例えば熊本日日新聞の場合、題字には何種類の絵が書かれ、その意味するものは何、と問い掛けます。日頃見過ごしがちな題字ですが、そこに込められた独自のメッセージを読み取ると新聞への興味も湧きます。いろいろな地方紙、全国紙の題字をじっくり眺めてみましょう。



②何の写真？質問で迫ろう＝解説参照

記事は概ね文字と写真からなっています。そこで写真だけを示し、それが何を意味する写真であるかを考えてもらうゲームです。

質問を重ねることで解答に迫るやり方ですが、参加者からの質問に対しては「YES」か「NO」でしか答えません。この写真の場合、「写っている車はパトカー？」(YES)という問いは有効ですが、「中央の人物は何をしているの？」といった質問はNG。質問力をつける練習にもなります。



③テレビ番組、どこか変？＝解説参照

4 00 夕方いちばん 福岡の
半端ないバス旅！▽金
沢のお土産が大人気▽
5 直近天神ファッション
樹木もまぶしい秋の旅
最高の味覚▽▽Nスタ
6 終わらない音楽への愛
回を重ねカントリーG
!!必ず会える約束の日
6.50ちびっ子◇54パンパカ

新聞で一番読まれるのはラテ(ラジオ・テレビ)欄。短い字数で番組内容をどう伝えるか工夫を凝らしてありますが、この番組表記はかなりユニーク。さてどこが…、と問い掛けます。難しそうな場合は「左端の1文字をタテに読んで」とヒントを出します。

(2)メディアって何？

①「不便益」という発想＝解説・ワークシート参照

不便益とは、一見不便に思えるが実はそこがすごい、ためになるという考え

方。例えば手紙。電子メール全盛の中で不便そのものに思えますが、手紙でしか伝えられないもの、手紙ならではの味わいといったものがあります。そろばん、扇風機、障子…他にも私たちの回りにはいろんな不便益がありそう。グループで話し合っ発表します。

グループ発表の中で「新聞」と出てきたら、それをテーマに深めます。新聞が出てこない場合は、「不便益の最たるもの、実は新聞かも」と切り出し、新聞の不便な点、有益な点についてのグループ討議・発表に移ります。

発表内容が似通ったものにならないよう、各グループに対しては「内容の重なりはダメ。そのためには幾つもの事例を考えて」と呼び掛けると、より論議が深まります。

新聞の不便な点としては「リアルタイムで情報を得られない」「金がかかる」「読むのに時間がかかる」など、有益な点としては「自分に興味のない情報も入ってくる」「一覧性がある」「見やすさがある」「切り抜いてためておける」などが想定されます。これは一例に過ぎず、自由な論議を通じてユニークな発想が生まれる雰囲気づくりを心掛けましょう。

② 各メディアの長所、短所を知ろう＝ワークシート参照

新聞の不便益に目を向けた次は、いろんなメディアについて考えます。テレビ、ラジオ、インターネット、書籍、週刊誌などの分野ごとにグループを分け、それぞれの長所、短所を話し合っ発表します。

要は、「誰かに何かを伝えたい時の情報の乗り物」とも定義づけられる各メディアには、それぞれ特性があることを実感してもらいます。各メディアの持ち味は何かを知って、それを生かすことが多メディア社会を生きる私たちにとっていかに重要であるかを確認したいものです。

(3)新聞のチカラ

①「伝える」と「伝わる」は別

新聞を教材として使う上で、記事の表現上の特性について紹介します。

何かを人に伝える際に最も心したいことは、「伝える」と「伝わる」は別、という考え方。何かを話したり書いたりする時、伝えようとする内容が自分に理解できることは当然のことですが、それがそのまま他人に伝わるかとなると、別問題という意味です。

現場を見ていない読者に、どう表現すれば的確に伝わるかー記事は常にこのことを心掛けています。新聞社に「デスク」という職務が存在するのも、そのためです。現場に出向いた記者は、記事をどう書いても自分では理解できますが、それが読者にきちんと伝わるかという視点でデスクはチェック作業を行います。

いろいろな見出しが出ることで会場は盛り上がりますが、学習のためには実例を示しながら次のような指摘をします。

- ・見出しは最低限、主語と述語が必要(この例では「山口」「優勝(V)」)
- ・主語と述語だけではそっけないので、ニュースの価値を盛り込む(この例では「日本勢初」)
- ・最大の見せどころは「16歳」。山口を知らなくても、16歳という若さが未来の可能性を感じさせ、読者を引き付けることになる。

さらに強調したいのは、先に述べた「他人にも分かるか」という視点。ワークショップでは記事を読んだ上で見出しを見つけます。よって、どんな見出しをつけても自分には分かります。ところが、実際の新聞読者は記事よりも先に見出しを見ます。そんな読者、つまり他人にも一目で分かるようにするにはどう表現するか、というケーススタディとなります。

③事実と意見(客観と主観)を見分ける

「事実的な文章はどちら？」

問ア A「長澤まさみは日本で最も魅力的な女優だ」

B「長澤まさみの父親は元サッカー日本代表だ」

答 Bが事実的。

Aは異論を唱える人がいる可能性もあり、意見(主観)といえる。

問イ A「今日は6日ぶりの真冬並みの寒さになりそうです」

B「今日は6日ぶりの真冬日になりそうです」

答「真冬並み」と感じるかどうかは個人差があるから、それを「6日ぶり」と線引きすることはできず、意見(主観)といえる。一方、Bの「真冬日」は最高気温が零度未満と定義されるから、客観データに基づいた事実的表現といえる。

事実とは、そのことを知っているかどうかの問題ではなく、何らかの方法で調べたら全員が同じ結論にたどりつくことを指す、という定義があります。

では、新聞は全てが事実的かといえば必ずしもそうではなく、紙面には事実と意見が混在しています。記事のどこが事実的で、どこが意見なのかを見分ける必要があります。子供などはともすれば、新聞やテレビなどで報道されることは全て事実と思いがちですが、そこには事実と意見があり、それを区別できる力を身につけさせたいものです。

そもそもメディアは編集されているのです。例えば何か大きな出来事があると、新聞には「識者談話」が掲載されますが、識者としてどんな立場の人を登場させるかという段階で既に、一種の編集が行われているといえます。テレビや

ずも同様の見出しになったのは、市長の平和宣言の「日本政府に被爆国としての原点に戻ることを求める」という言葉が、記者の胸に強く響いたためと思われる。

イ、各紙の1面トップ記事が全部バラバラ

政治や経済の表立った動きが起きにくい休み(土・日・祝日)明けの紙面ありがち。これという決定打のない日は、どの記事をトップに仕立てるか各社苦勞します。よって、休み明けの紙面は各紙の個性が表れやすいともいえます。

ウ、扱いは相対的

特定秘密保護法が平成25年12月6日深夜、国会で成立しました。国政の根幹にかかわる問題であり、国民の関心も高い法案とあって、各社とも大方が翌日朝刊の1面トップ扱いにしましたが、実はこの日、南アフリカのマンデラ元大統領死去というビッグニュースも飛び込みました。もし、特定秘密保護法の成立がなければ、元大統領死去がトップ扱いになったと思われませんが、各紙とも国内ニュースを優先し、死去のニュースは準トップとなりました。記事の扱いの大小は絶対的なものではなく、相対的であり、他のニュースとの兼ね合いによって決まります。よって、小さい扱いだからといって大したことのない記事、とはなりません。

③社説を比較＝ワークシート参照

新聞社の主張を示す社説の重要性は言うまでもありません。ある特定のテーマについて、各紙が社説でどう取り上げたかを比べると、その論調に明確な、あるいは微妙な違いのあることが分かって興味深いものです。「社会のいろんな出来事を多面的にとらえ、それを自らの視点で読み解く」というメディアリテラシーを実感するうえで、社説の読み比べは格好の教材となります。

例えば、平成25年12月6日成立の特定秘密保護法をテーマにした各紙社説を比較します。社説の見出しを幾つか拾うと、「憲法を骨抜きにする愚挙」「抜本的な欠陥是正を急げ」「適正運用で国の安全保て」「国家安保戦略の深化につなげよ」となっており、論の展開の違いがうかがえます。

まずは一人ひとりで読み込み、次にお互いが気付いた点をグループで話し合います。ワークシートでは、①共感する主張②違和感を覚える表現③その他気付いた点の3項目を立てましたが、項目を分けずに自由に語り合うこともできます。

社説は硬いイメージがあり、しかも読み込むのに時間がかかるため、対象者

によっては敬遠されることもあります。読み比べは社説に限らず、コラム、皇室敬語の使い方、「人」欄の取り上げ方、スポーツ記事の扱い方など幅広いジャンルでできます。その際、比較しやすいように、できれば各紙同じテーマを取り上げた記事を使う方が効果的です。

(5)これ何の広告？ = 解説参照

ある新聞広告。「ボクのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました」というキャッチコピーと鬼の子供が泣いているイラストだけを示して、誰が、何のために出した広告かをクイズで問います。



(熊本日日新聞、平成25年12月16日付)

要は、物事を一方的な視点だけでとらえず、相手の立場に立って考えることの難しさ(必要性)を訴えた広告で、しかもスポンサーが日本新聞協会というところがミソです。

実際の回答例として、「鬼の名がつく焼酎の宣伝」「桃太郎の名がつくノリのPR」「岡山県のアピール」「人権への配慮呼び掛け」などがありました。

場の展開に応じて、鬼のイラストの下に小さく書かれた、次の言葉をヒントとして示します。「一方的な『めでたし、めでたし』を、生まないために。広げよう、あなたが見ている世界」。

このヒントを示すと、単にモノを売る広告ではないかと察する人が出て、新たな展開が期待できます。

(6)新聞と投票行動(投票率高い新聞読者) =解説参照

投票率クイズ「新聞を読む人の投票率は何%でしょうか？」

- ・自民党が圧勝した平成24年12月の衆院選。さて、新聞読者は何割が投票に行ったと思いますか、とアンケート結果を問い掛けます(ちなみに同選挙の全有権者の投票率は60.11%)。
- ・平成25年7月の参院選。同様に、新聞読者は何割が投票に行ったかを問います(この時の全有権者の投票率は52.6%)。

衆院選90%、参院選85%—新聞を読んでいる人は極めて高い割合で投票に行くという事実を、端的に示した2つのデータです。ただ、新聞社が行った読者アンケートという点で、やや“身びいき”の印象を受ける人もあるかもしれません。そこで、公益財団法人明るい選挙推進協会が、全国の有権者3,000人を無作為で抽出して実施した意識調査の結果を紹介します。

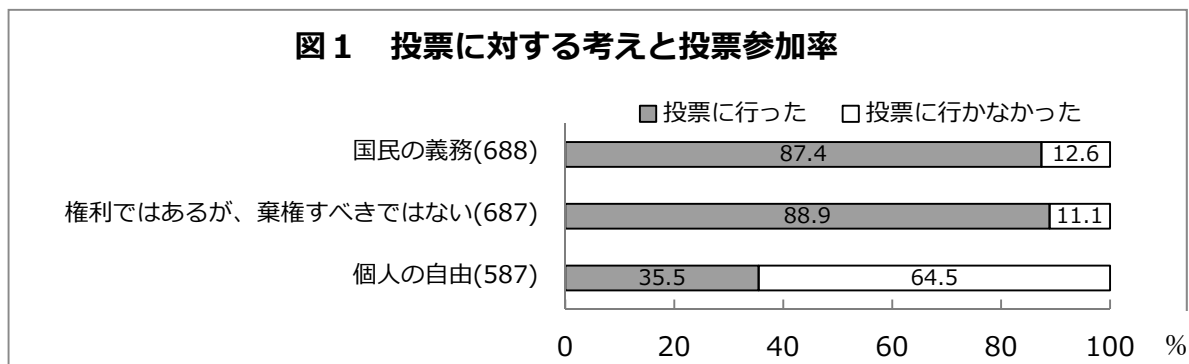


図1は投票に対する考えと投票参加率のデータ(平成25年参院選調査)です。選挙で投票することは「国民の義務」「権利だが棄権すべきではない」「個人の自由」のいずれの考えに近いかという、投票に対する意識が投票参加率に与える影響をみたものです。「国民の義務」を選択した人の87.4%、「権利だが…」を選択した人の88.9%が投票に行ったと答えています。一方、「個人の自由」を選択した人で投票に行ったと答えた人は35.5%にとどまっています。

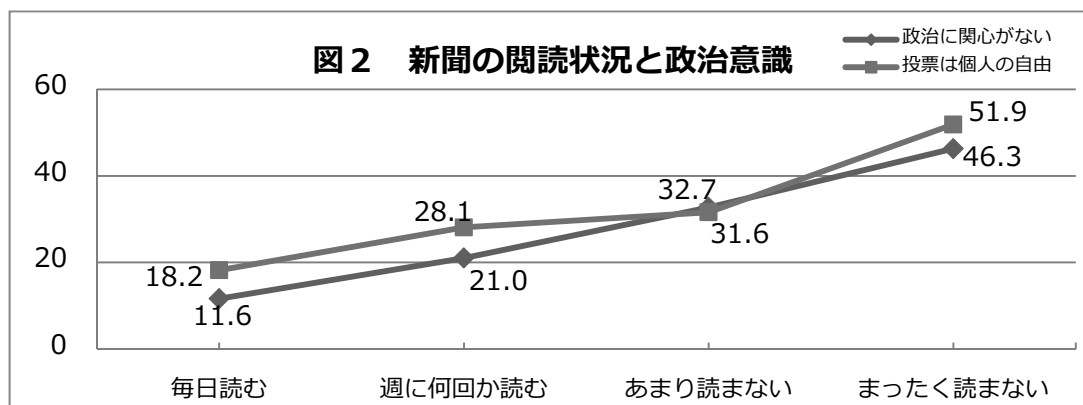


図2は、新聞の閲読状況と政治意識のデータ(平成21年2月有権者調査)で、「投票は個人の自由」「政治に関心がない」と答える人ほど、新聞の閲読状況が低くなっています。

上記二つのことから「新聞を読む習慣の有無は、投票への動機づけに相応の影響を及ぼしていると思われる」と同協会は分析しています。

(7)「新聞ヨム、社会ワカル」+「投票率カワル」

日本には100社を超える新聞(日本新聞協会加盟)があり、毎日、4700万部の新聞が発行されています。なぜそんなに必要なの、資源(紙)の無駄遣いでは、といった声も一部にあるかもしれませんが、しかし、それぞれの“顔”を持つ新聞が多様に存在し、それが有権者の社会を見つめる目の広がりや深化につながり、ひいては日本の民主主義の一端を支えることになるという見方は、決して大げさではないと考えます。

日本新聞協会が有名タレントを起用して作成した「春の新聞週間」用のポスターがあります。そのキャッチコピーは「新聞ヨム、社会ワカル」です。「ワカル」をもじると「カワル」となります。

そこで、「新聞ヨム、社会ワカル、投票率カワル」(新聞をヨムと社会がワカル、ひいては投票もカワル=アップする)という新(珍?)コピーの誕生です。メディアと投票率との間に、こんなつながりが生まれることを願ってやみません。



4 解説、解答、ワークシート

ウォーミングアップクイズ①「題字は大事」

星、月、太陽、山、森、象、虎、鳥、川、男女など20種以上が描かれている。世に存在するあらゆるもの(森羅万象)を、人間の喜怒哀楽も含めて掲載したいというメッセージを込めている。

・意味を読み取るのが難しい題字については、その新聞社に聞くと教えてくれる。

ウォーミングアップクイズ②「何の写真？」

(熊本日日新聞、平成24年11月9日付)

◆大学入試、警察も
奔走 受験競争が激し
い韓国で8日、日本の
大学入試センター試験
に相当する大学修学能
力試験が行われ、警察
が遅刻しそうな受験生
を試験会場に送り届け

パトカーで試験会場に着いた、遅刻しそ
うな受験生 = 8日、ソウル市内(聯合 = 共同)



約3千人の警官を配置
し、交通整理や受験
生の送り届けに対応。
メディアが試験の出題
傾向を速報するなど、
国中が受験ムード一色
となった。
(ソウル共同)

たり、後輩
が校門前で
集団で応援
したりする
毎年恒例の
光景が見ら
れた。
ソウル地
方警察庁
は、ソウル
市内の試験
会場周辺や
主要交差点
などに普段
の倍近くの

ウォーミングアップクイズ③「テレビ番組、どこか変？」

左端の1文字をタテに読むと「半沢直樹最終回」となる。平成25年の人気テレビ番組「半沢直樹」の最終回を控えて、その告知を遊び心たっぷりに盛り込んだもの。作成したテレビ局(RKK熊本放送)の担当者によると、こうした“チャレンジ”は珍しいケースで、残念ながら気付いた読者は少なかったという(熊本日日新聞、平成25年9月20日付)。

「新聞の不便益」大学生の発想例

(公益財団法人明るい選挙推進協会主催の研修会、平成25年12月15日、熊本市)
新聞の不便な点

「自分の知りたい情報がどこにあるかわからない」「リアルタイムに情報を得られない」「テレビより情報が遅い」「コンパクトでない」「おカネがかかる」「自分に興味のある情報が手に入らない」「情報が一方通行である」「読むのに時間がかかる」「配達が必要」「活字が小さくて読みにくい」「紙のため破れるなど材質的に弱い」

新聞の有益な点

「自分に興味のない情報も入ってくる」「一覧性がある」「地元の情報が得られる」「広告が多数掲載されている」「見やすさがある」「何度でも読み返せる」「切り抜きができてためておける」「情報が一度にたくさん手に入る」「リサイクルに使える」「靴を乾かすことに使える、窓を拭ける、物を包むことができる」

要約のワザ(見出し実例)

16	歳	山	口	日	本	勢	初	V
----	---	---	---	---	---	---	---	---

コラムのタイトル

- ・産経抄 産経新聞
- ・春秋 西日本新聞
- ・春秋 日本経済新聞
- ・新生面 熊本日日新聞
- ・天声人語 朝日新聞
- ・編集手帳 読売新聞
- ・余禄 毎日新聞

これ何の広告？

日本新聞協会が平成25年度、「しあわせ」をテーマに募集した「新聞広告クリエイティブコンテスト」の最優秀作品。作品タイトルは「めでたし、めでたし？」で、審査員から「逆からの視点で幸せとは何かを考えさせる発想が抜きんでいて」と評価された。ある人にとって幸せなことでも別の人から見ればそう思えないこともあるとして、一方的な見方は禁物だと教えてくれる。これはメディアリテラシーと直結する視点であり、新聞というメディアの自戒でもある。

新聞読者の投票率

新聞読者の9割投票

衆院選で8紙が調査

日本経済新聞など新聞8紙の読者アンケートで、90%が昨年12月の衆院選で「投票に行った」と回答したことが24日、分かった。

8紙の読者を対象に調査するシステム「ジェイ・モニター」を利用して衆院選後の昨年12月17～22日にインターネット上で実施。首都圏、近畿圏、中京圏、福岡県の有権者3207人が回答した。

投票に行った人の割合を年代別にみると、60代が95.7%で、20代は80.2%だった。

投票先を決める際に参考にした情報（複数回答）は、新聞記事が74.8%と最も多く、次いでテレビ番組46.5%、選挙公報28.0%と続いた。投票する際に重視した政策（複数回答）は「原発・エネルギー政策」「経済政策・景気対策」「年金制度」「外交・安全保障」の順に多かった。

衆院選が決まってから「普段より新聞を詳しく読むようになった」「新聞を読む時間が増えた」との回答も多く、担当者は「選挙期間中、新聞を通じ選挙の争点などを把握した読者が多かったようだ」と分析している。

（熊本日日新聞、平成25年1月25日付）

◆85%が参院選投票
中日新聞など新聞13紙の読者アンケートで、7月の参院選で「投票した」と答えたのが85.6%に上った。参加各社が15日付で発表した。

新聞広告の効果を共同で調査するシステム「ジェイ・モニター」を利用し、選挙後の7月22～27日にインターネット上で実施した。

北海道、首都圏、中京圏、近畿圏、福岡県に
住む20～69歳の読者
386人が回答した。
投票した人を年代別に
みると、20代が74.1%だったのに対し、
60代は93.2%に上
った。参院選の投票率は
52.6%。

（熊本日日新聞、平成25年8月15日付）

ワークシート 1「新聞の不便益」

不便な点	<ul style="list-style-type: none">•••••••••
有益な点	<ul style="list-style-type: none">•••••••••

ワークシート2「メディアの長所・短所」

メディア	長所	短所
テレビ		
ラジオ		
インターネット		
書籍		
週刊誌		

ワークシート3「社説読み比べ」

新聞 (五十音順)	社説のテーマ「○○○○○○○」		
	共感する主張	違和感を覚える箇所	その他気付いた点
○○新聞	(個人)		
	(グループ)		
○○新聞			
○○新聞			

「読み、生かし、味わう～『しんぶんカフェ』の試み」

— テーマ別、対象者別の実践講座—

熊本日日新聞社N I E 専門委員

越地 真一郎

(熊本大学客員教授、熊本学園大学招聘教授)

1. 多彩な切り口で

「新聞をさまざまな視点で読み、生かし、味わう、新しい学びの場が広がっている。子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にした『しんぶんカフェ』の試みだ。カフェを展開する越地さんと、実践の場をシリーズで紹介する」—こんなリード文で始まる連載記事が毎月1回、熊本日日新聞に掲載されています。

「新聞はあらゆる世代の学びの共通テキスト」というコンセプトのもと、学校だけでなく社会人や親子、高齢者などさまざまな層を対象に、それぞれテーマ（切り口）を変えて新聞活用の輪を広げようという試みです。

「しんぶんカフェ」は現在、熊本県内の6カ所で実施中です。大学が3カ所（熊本大・熊本学園大・東海大熊本キャンパス）、地域が3カ所（宇城市・大津町・天草市）です。

連載記事は、この「しんぶんカフェ」の実践例をピックアップして紹介しているもので、平成25年4月から26年6月時点までに取り上げたテーマおよび対象は、次の通りです（計14回、表記は見出しから）。

- ① 仕事力向上に生かす～端的に要約、結論を先に（社会人）
- ② 閲読時間長いシニア～経験生かし、読み方多彩（高齢者）
- ③ 若者の投票行動～活字通して社会に関心（大学生）
- ④ 命と向き合う看護師～生きる意味も問い掛け（看護協会）
- ⑤ 家庭の活字環境～紙面を会話のきっかけに（親子）
- ⑥ 教材の宝庫～読めば何かが出てくる（教師）

- ⑦ 伝わる小論文の書き方～結論は最初と最後に（高校生）
- ⑧ 各国紙面と読み比べ～情報の海、溺れない工夫を（大学留学生）
- ⑨ スクラップの不便益～本物の情報、手間暇かけて（JA幹部、大学生）
- ⑩ 番外・県内大学生が連携イベント～活字に親しむ契機に（県内大学生）
- ⑪ 紙面から格言探し～言葉の引き出しを多く（教師）
- ⑫ 情報読み取る能力～判断できる有権者に（明るい選挙推進協議会）
- ⑬ 読む、書く、話すを学ぶ～紙面から言葉のシャワーを（専門学校生）
- ⑭ 交流広げ深めるメディア～記事通じ世代間で対話（高齢者＋専門学校生）

※今後の予定（記事と図書を組み合わせた新ビブリオバトル、記事でディベート、読み比べ、誌面でみる男女共同参画、切り抜き、新聞づくり…など）

これらのささやかな実践を通じて実感することは、新聞は汲めども尽きぬ教材の宝庫である、ということ。生涯を通じた学びの欲求が高まりつつある今日、新聞のチカラと魅力をもっと社会のいろんな場に広げていけたら、と願ってやみません。

2 掲載された新聞記事

参考までに、上記の中から②⑤⑧⑨⑫⑭の紙面（縮小版）を掲載します。参考にしてください。

また、「しんぶんカフェ」のちらし2点も掲載します。



経験生かし 読み方多彩

閲読時間長いシニア

新聞をさまざまな視点で読み、生かし、味わう、新しい学びの場が広がっている。子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にした「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開する熊日の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介する。

読み生かし味わう しんぶんカフェ

②



越地真一郎さん

◇「えい、しんじちゅう、1951年生まれ。熊日記者を経て現在、熊日NIE専門委員。熊本大賞員、熊本学園大招聘教授のほか複数の大学の非常勤講師も務め、各地で新聞活用講座を開いている。「新聞はあらゆる世代の学びの共通テキスト」が持論。

4月20日、大津町中央公民館でNIE教育に新聞をに関する自主講座が開かれた。今年3月、同町杉水の主婦、与古田公三(69)ら町民有志がスタートさせた講座、2回目のこの日は、約20人が参加した。

「20代15分、30代17分、60代34分、70代41分」日本新聞協会が年代ごとに調べた新聞の閲読時間が参加者に示された。年代が高くなるほど閲読時間は長い。講座の参加者は現役を退いたシニア世代が中心。越地さんが呼び掛けた。「長く読んで初めて『新聞を味わう』という視点が出てくる。それができるのはシニア世代。豊富な人生経験を記事に重ね合わせる「LIFE STORY」

関連して、子猫の詩が示された。「この絵はあじがある」と言っていたあじさんが、孫から「あじって何？」と聞かれ、答えに窮する内容。参加者は同じ質問を受け、それぞれが持つ「あじ」のイメージを述べた。「人生いろいろ、読み方いろいろ」。越地さんは「『あじ』について、始めに喜怒哀楽の感情ごとに新聞を読む手法を紹介した。参加者はその日の朝刊から、「喜・楽」に合った記事、「怒・哀」に合った記事を1本ずつ選び出した。



町民有志がいろいろな新聞の「味わい方」を学んだ自主講座 = 4月20日、大津町中央公民館

安倍晋三首相が示した成長戦略に関する記事は「喜・楽」、ボストンの連続爆破テロの記事は「怒・哀」。参加者が相次いで発表する中、ある記事をめぐっては参加者2人の受け止め方が真逆に割れた。

水俣病訴訟を争った訴訟の最高裁判決に従い、敗訴が確定した県民が既に死去した女性を患者認定したことを伝える記事。「喜・楽」として女性が「申請から何年もたつてはいるが、女性が認定されて良かった」と説明したのに対し、「怒・哀」として別の女性は「患者認定までに時間がかかり過ぎた」と行政の対応を批判した。

次の記事を選んだ基準は「自分の関心事」。越地さんは「孫がかわいければ、子どもに関する情報も飛び込んでくる。しかし、何の関心もなければ情報は素通りする。関心の幅をもっと広げてほしい」とアドバイスした。

最後は「第三者の視点で読む」。「織田信長が読むとすれば…」という質問には、「(独占的に商売をする特権を廃した) 薬市薬座を実行した信長なら環太平洋連携協定(TPP)の記事」「各地の大名を抑え込むのに利用しよう」と、インターネットに関する記事には「関心があるのでは」といったユニークな回答が相次ぎ、会場は和やかな雰囲気になった。

自主講座は毎月第3土曜日に続けていく予定。与古田さんは「同じ記事でも異なる見方があるのは、こうして集まらないと分からない」と講座の意義を強調した。この日の講座に飛び入りで加わった町教委の那須雪子教育長は「学校だけでなく家庭や地域にも、新聞を媒介とした人と人とのつながりが広がってほしい」と期待した。(石貫謙也)

あじ

白鳥 晋帆(5年)

「この絵はあじがある」と表現する場合の「あじ」とは？

資料は昨年3月2日付の熊日紙面から引用。自主講座の参加者は「個性」「素朴で気取らないこと」「その人だけしかない良さ」「雰囲気」などと答えた。越地さんは「こういうものに答えはないけれど、私ならこう言う」と前置きした上で、「おいしいものが何度も食べたくなるように、あじのある絵は何度でも見てみたくなる」。

「あじ」の絵はあじがある

あじ

「この絵はあじがある」と表現する場合の「あじ」とは？

資料は昨年3月2日付の熊日紙面から引用。自主講座の参加者は「個性」「素朴で気取らないこと」「その人だけしかない良さ」「雰囲気」などと答えた。越地さんは「こういうものに答えはないけれど、私ならこう言う」と前置きした上で、「おいしいものが何度も食べたくなるように、あじのある絵は何度でも見てみたくなる」。

あじ

「この絵はあじがある」と表現する場合の「あじ」とは？

資料は昨年3月2日付の熊日紙面から引用。自主講座の参加者は「個性」「素朴で気取らないこと」「その人だけしかない良さ」「雰囲気」などと答えた。越地さんは「こういうものに答えはないけれど、私ならこう言う」と前置きした上で、「おいしいものが何度も食べたくなるように、あじのある絵は何度でも見てみたくなる」。

「この絵はあじがある」と表現する場合の「あじ」とは？

資料は昨年3月2日付の熊日紙面から引用。自主講座の参加者は「個性」「素朴で気取らないこと」「その人だけしかない良さ」「雰囲気」などと答えた。越地さんは「こういうものに答えはないけれど、私ならこう言う」と前置きした上で、「おいしいものが何度も食べたくなるように、あじのある絵は何度でも見てみたくなる」。

紙面を会話のきっかけに

家庭の「活字環境」

⑤

新聞をさまざまな視点で読み、生かし、味わう、新しい学びの場が広がっている。子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にした「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開する熊日の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介する。

読み生かし味わう しんぶんカフェ



越地真一郎さん

○しんぶんいっしょ 1995年生まれ。熊日記者を経て現在、熊日NIJ専門委員、熊本大客員教授、熊本学園大招聘教授のほか複数の大学の非常勤講師も務め、各地で新聞活用講座を開いている。「新聞はあらゆる世代の学びの共通テキスト」が持論



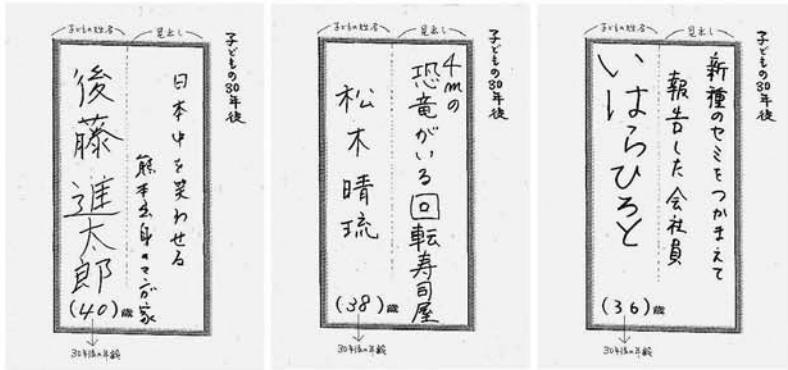
わが子の30年後を想像して付けた「人」欄の見出しを発表し合うセミナーの参加者=7月20日、合志市

親子を対象にした新聞活用セミナーが7月20日、合志市須屋の西合志南小で開かれた。PTAが初めて企画、46人が参加した。まずは、新聞にちなんだクイズを解くビンゴゲームで肩慣らし。最後の問題は「小学6年生までに学校で習う漢字はいくつ?」だった。正解は1006。社会生活で使う目安となる常用漢字2136

親を対象にした新聞活用セミナーが7月20日、合志市須屋の西合志南小で開かれた。PTAが初めて企画、46人が参加した。まずは、新聞にちなんだクイズを解くビンゴゲームで肩慣らし。最後の問題は「小学6年生までに学校で習う漢字はいくつ?」だった。正解は1006。社会生活で使う目安となる常用漢字2136。付けた見出しは、紙に書いて披露。子どもの好きなこと、夢中になっていることなどをベースに、具体的に夢を膨らませたものが多かった。この日は夏休み初日。子どもと接する機会が増える親たちに越地さんが呼び掛けた。「念のためわが子を見つめていないと、具体的な見出しは付かない。わが子の特性は何なのか。どんな生き方をしたいのか。夏休みを機に、じっくり観察してほしい」。最後の話は「保護者の方へ」。子どもの学力に影響を与えるものとして、越地さんは最近よく言われる「親の収入」より「家庭の活字環境」を重視した。絵本を読み聞かせて、本がたっさんあり、記事について子どもと話す家庭は、そうでない家庭よりも子どもの学力が高いというデータを紹介。「子どもを取り巻く活字環境は、その気になればどの家庭でも整えられる」と話し、新聞を題材に親子

のおよそ半分を占める。新聞は基本的に常用漢字を使用。越地さんは「小6でも半分は読める。新聞は難しく、と初めから敬遠しないでほしい」と訴えた。新聞の中から記事を二つ選び、家族にプレゼンする。新聞をきっかけに会話を広げる越地さんのアイデアだ。親は子に、子は親に思いをめぐらせながら、当日の朝刊をめくった。連載小説を贈った男の子は「お母さんは物語が好きだから」、高校野球の記事を贈った母親は「高校球児のひた向き

な姿を息子に知ってほかった」。本場が優しい雰囲気にも包まれた。新聞には、話題の人を紹介する囲み記事がある。熊日なら「人」欄。「○○○した△△△さん」(□)といった見出しが一般的で、○は成し遂げた内容、△は名前にした。越地さんが親たちに課題を出した。「お子さんの30年後を想像して、具体的な見出しを付けてください。夢を膨らませるのは大事ですが、あくまで現実の延長線上で」。付けた見出しは、紙に書いて披露。子どもの好きなこと、夢中になっていることなどをベースに、具体的に夢を膨らませたものが多かった。この日は夏休み初日。子どもと接する機会が増える親たちに越地さんが呼び掛けた。「念のためわが子を見つめていないと、具体的な見出しは付かない。わが子の特性は何なのか。どんな生き方をしたいのか。夏休みを機に、じっくり観察してほしい」。最後の話は「保護者の方へ」。子どもの学力に影響を与えるものとして、越地さんは最近よく言われる「親の収入」より「家庭の活字環境」を重視した。絵本を読み聞かせて、本がたっさんあり、記事について子どもと話す家庭は、そうでない家庭よりも子どもの学力が高いというデータを紹介。「子どもを取り巻く活字環境は、その気になればどの家庭でも整えられる」と話し、新聞を題材に親子



わが子が「人」欄に載るとしたら??

セミナーではまず、親が子に興味のあることなどを聞き取り。用紙の左側にわが子の氏名、右側に30年後のわが子が成し遂げる内容、左下にその時の年齢を記入した=写真は記入例。30年後にした理由は「親とほぼ同世代に

なるから」(越地さん)。成し遂げる内容は、サッカー選手やパティシエになって成功することなどが目立った。「新種のセミをつかまえて報告した会社員」などユニークな内容もあった。

月刊 NIE
Newspaper in Education
教育に新聞を

情報の海 溺れない工夫を

各国紙面と読み比べ

新聞をさまざまな視点で読み、生かし、味わう、新しい学びの場が広がっている。子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にした「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開する熊日の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介する。

読み 生かし 味わう しんぶんカフェ

8



越地真一郎さん

◇しんぶんカフェ 1951年生まれ。熊日記者心を継ぎ現在、熊日NIE専門委員、熊本大客員教授、熊本学園大招聘教授のほか複数の大学の非常勤講師も務め、各地で新聞活用講座を開いている。「新聞はあらゆる世代の学びの共通テキスト」が持論

毎週月曜の午前7時半、熊本市中央区黒髪熊本大に学生らが集まり、「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開する熊日の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介する。



母国の新聞室に、メディア事情について話す熊本大の留学生
10月21日 熊本市中央区

日本	431.8	アメリカ	183.6
ドイツ	254.5	フランス	177.6
イギリス	247.2	イタリア	109.0
カナダ	208.3	ロシア	75.3

※2012年調査時点の部数。「世界新聞・ニュース発行者協会」の調査報告書から作成した

部数 日本は主要国最多 成人千人あたり431部

各国で新聞はどのくらい普及しているのか。「世界新聞・ニュース発行者協会」の調査報告書によると、2012年の調査時点で成人千人あたりの部数は日本431.8部、主要国(G8)で最多だが、ルクセンブルク(694.2部)、アイスランド(545.5部)などは日本を上回る。

一方、日本新聞協会などによると、戸別配達率は12年の調査時点で日本94.9%。外国は09年調査時点だが、韓国90.8%、オランダ90.1%、アメリカ74%といった状況だ。

熊本大の越地さんが各地に輪を広げている「しんぶんカフェ」の原点だ。越地さんは、熊本大に学生らが集まり、「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開する熊日の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介する。

「政府系の新聞は大統領の行動に穴を充てる」(カメルーン)など話した。英語を交えて行われた討議は、各国のメディア事情もテーマに。留学生の説明から浮かび上がったのは、日本と同じように新聞がインターネットに押されている状況だった。

「新聞記事はインターネットを通じて読まれている」とオランダや中国の留学生。フランスの留学生は「新聞業界は危機的状況で倒産する社も出ている」と話した。一方、「新聞は最も信頼されるメディアの一つ」(インドネシア)「トップ記事が面白い新聞は売れている」(カメルーン)といった声もあった。

教育に新聞を

月刊 NIE

Newspaper in Education

本物の情報手間暇かけて

スクラップの「不利益」

新聞をさまざまな視点で読み、生かし、味わう、新しい学びの場が広がっている。子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にした「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開する熊日の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介する。

読み生かし味わう しんぶんカフェ



越地真一郎さん

◇しんぶん・しんいちろう 1951年生まれ。熊日記者を経て現在、熊日NIE専門委員、熊本大客員教授、熊本学園大招聘教授のほか複数の大学の非常勤講師も務め、各地で新聞活用講座を開いている。「新聞はあらゆる世代の学びの共通テキスト」が持論。

9



小論文を書くために自分たちが取り組んできたスクラップの成果を見せ合う熊本の学生たち=3日、熊本市中央区

県内JAの幹部職員を育てる研修会「未来塾」が毎年、1年近くにわたって開かれている。11月7日は合志市のJA熊本教育センターで今年3回目の新聞活用講座があり、塾生15人が参加した。越地さんが「不利益」という耳慣れない言葉を持ち出した。「不利益、不便さだけでなく、そこがためは切り抜くためにある」とスクラップを勧め、「P・PからP・Pへ」という愛読書の一節を紹介し

になる」という意味。「新聞のスクラップは、その最たるものかもしれない」と続けると、塾生は「うんうん」とうなずいた。

塾生には、9月にあった今期1回目の新聞活用講座でスクラップが課してあった。テーマは農業。そのスクラップを基にした小論文も、併せて課されていた。

9月の講座、越地さんは「新聞は切り抜くためにある」とスクラップを勧め、「P・PからP・Pへ」という愛読書の一節を紹介し

A4判の紙に貼り付けた越地さんのスクラップ記事。奥はそれらをテーマごとに分類した封筒



越地さんの手法は？ 分類して封筒に

越地さんのスクラップ手法は、記事1本をA4判の紙1枚に貼り付け、それをテーマごとに分類して封筒に入れるやり方だ。カード大のノートや専用のスクラップ帳に貼り付けるやり方を経て、現在の手法に落ち着いた。

長所はA4判が世界の主流であることや、1枚ずつバラバラのため自在の組み合わせが可能なことだ。講演の題目を与えられた時など、関連するテーマの封筒をいくつか取り出し、使えそうな記事を探すといい。

これまでに数万枚をスクラップしたが、ほとんど使われないものは廃棄。現在残っているのは4千5百枚という。分類テーマは200近く。時事問題が中心だが、「有情」「UDF/宇宙」「川内原発（公務員ランナー）」なども。

再び11月の講座。塾生は2カ月近くに及びスクラップを踏まえ、その不利益を「不便」と「益」に分けて議論した。不便については「切ったり貼ったり面倒」「手が汚れる」「こみが出る」などの意見が出た。一方、益については「関心がなかった分野にも目を向けるようになった」「幅広い見方

た。「パブリックペーパー」（公紙）が切り抜きを経て「プライベートペーパー」（私紙）になるという意味。バレーボール日本代表の監督が選手に「社会性も身につけてほしい」と記事スクラップを課したというエピソードも紹介し、「競技も最後は人間性の勝負」ということなのだろう」と推し量った。

再び11月の講座。塾生は2カ月近くに及びスクラップを踏まえ、その不利益を「不便」と「益」に分けて議論した。不便については「切ったり貼ったり面倒」「手が汚れる」「こみが出る」などの意見が出た。一方、益については「関心がなかった分野にも目を向けるようになった」「幅広い見方

初、公共交通機関のサービス向上

「J A 鹿本の有働貴史さん(34)が選んだ小論文のテーマは、食材の虚偽表示。「生産者側に立った記事を多く集めた。虚偽表示をテーマに選んだのは、生産者がなぜか怒っているだろうと思ったからだった」と話した。

越地さんは自身が客員教授を務める熊本大でも、スクラップに基づいて小論文課題を文学部コミュニケーション情報学科の学生に与えていた。今年3日の講座では、学生同士で小論文を評価し合った。1年生の藤村有紀さん(19)は当初、公共交通機関のサービス向上

をテーマに小論文を書く予定だったが、「スクラップをするうちに考え方が変わった」という。変更後のテーマは公共交通機関の安全性。JR北海道による点検記録の改ざんなどに関する記事を収集した結果だといい、「頭の中にどめておく作業を経ていなかったら、テーマを変更すべきだと気付かなかっただけかもしれない」と振り返った。(石貫謙也)



動画公開しています

今回の講座の動画を公開しています。
<http://kumanichi.com/n/cafe>

判断でできる有権者に

情報読み取る能力

12

1月24日、大分県豊後大野市で明
るい選挙推進協議会の研修会があつ
た。主催した県選挙管理委員会豊肥
地方書記局は「新聞などを通し、有
権者が社会に関心を持つことが投票
につながる」と考え、越地さんを講
師に招いた。

この研修会のために、越地さんが
選んだテーマはメディアリテラシ
ー。広辞苑によると、メディアの伝
える情報を批判的に判断・活用し、
それを運んでコミュニケーションを
行う能力のことだ。

「長澤まさみは日本で最も魅力的
な女優だ」「長澤まさみの父親は元
サッカー日本代表だ」
越地さんが参加者約30人に二つの
文章を示し、どちらが事実的か聞い
てみる。

「新聞が編集というフィルターを
通ることも言及、掲載しきれない
ほど送られてくる記事の中から、新
聞社が取捨選択している事情を説明
した。識者談話もあらかじめ答えを
想定してから取材するとして「バラ
ンスは考慮するが、同様の意見が
人中3人いたからといって大勢を占
めるわけではない」と注意を促した。
昨年12月7日の朝刊各紙が示され
た。1面トップは特定秘密保護法の
成立、2番手はマンデラ元南アフリ
カ大統領の死去に関するニュース。
越地さんは秘密保護法成立がなかつ
たらマンデラ氏死去がトップだった
可能性に触れ、「ニュースは相対的。
扱いが小さいからといって大したこ
とないと思わないでほしい」と強調
した。



新聞をさまざまな視点で読み、生かし、味わう、新しい
学びの場が広がっている。子どもから高齢者まで幅広い世
代を対象にした「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開
する熊日の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介
する。

読み生かし味わう しんぶんカフェ



越地真一郎さん

◇しんぶん・しんいちろう◇ 1951年生ま
れ。熊日記者などを経て現在、熊日NIE専門
委員、熊本大学教授、熊本学園大招聘教授
のほか複数の大学の非常勤講師も務め、各地で
新聞活用講座を開いている。「新聞はあらゆる
世代の学びの共通テキスト」が持論。



与えられた課題についてグループごとに発表する明るい選挙推進協議会のメンバーら
= 1月24日、大分県豊後大野市

これは何の広告?



越地さんが研修会で使った新聞広告のコピペ
の最優秀作品

研修会の中で、越地さん「た広告なのか聞いた。鬼やつに殺されましたと
んがある新聞広告を示すの子どもが「ボクのおと
し、誰が何のために出した。うさんは、桃太郎という
鬼の名が付く構図の宣伝
だろ」と答えた。

正解は日本新聞協会が
「しあわせ」をテーマに
募集した新聞広告コンテ
ストの最優秀作品で、タ
イトルは「めでたし、め
でたし?」。ある人にと
って幸せなことでも別
の人からみればそう思えな
いこともあるとして、見
方を広げようと呼びかけている。

※購読者専用ウェブサイト「くまにおプラ
ネット」の「暮らし&お役立ち」で研修会の動画
を見ることができます。NIEに取り組む教師
らによるコラム「先生からの便り」も併せてご
覧ください。

「新聞が編集というフィルターを
通ることも言及、掲載しきれない
ほど送られてくる記事の中から、新
聞社が取捨選択している事情を説明
した。識者談話もあらかじめ答えを
想定してから取材するとして「バラ
ンスは考慮するが、同様の意見が
人中3人いたからといって大勢を占
めるわけではない」と注意を促した。
昨年12月7日の朝刊各紙が示され
た。1面トップは特定秘密保護法の
成立、2番手はマンデラ元南アフリ
カ大統領の死去に関するニュース。
越地さんは秘密保護法成立がなかつ
たらマンデラ氏死去がトップだった
可能性に触れ、「ニュースは相対的。
扱いが小さいからといって大したこ
とないと思わないでほしい」と強調
した。

全国各地の協議会をつくる明るい選挙
推進協会(東京)の調査結果による
と新聞を多く読む人は投票率を国
民の義務」と考え、読まない人ほど
「個人の自由」と考える傾向が強い
という。同協会調査広報部の鈴木秀
毅さん(43)は「有権者には各報道機
関の論議を見定め、いろんな情報を
得た上で自分なりの判断ができるよ
うになってほしい。そのため有効
な手段として新聞は役立つはずだ
」と話す。(石貫謙也)

記事通じ世代間で対話

交流広げ、深めるメディア

14

新聞をさまざまな視点で読み、生かし、味わう、新しい学びの場が広がっている。子どもから高齢者まで幅広い世代を対象にした「しんぶんカフェ」の試みだ。カフェを展開する熊本の越地真一郎さんと、実践の場をシリーズで紹介する。

読み生かし味わう しんぶんカフェ



越地真一郎さん

◇こじ・しんぶん◇ 1951年生まれ、熊日記者などを経て現在、熊日NIE専任委員、熊本大客員教授、熊本学園大招聘教授、日本NIE学会理事なども務め、各地で新聞活用講座を開いている。「新聞はあらゆる世代の学びの共通テキスト」が持論



新聞を通じて世代間の交流を深める「しんぶん井戸端会議」のメンバーと熊本電子ビジネス専門学校(熊本市)の学生=5月26日、宇城市中央公民館

宇城市の60、70代の有志たち約10人が毎月2回、市中央公民館を主会場に開いている自主講座「しんぶん井戸端会議」が5月26日、通算100回を達成した。この日は、同じような新聞からの学びに取り組み始めた熊本電子ビジネス専門学校(熊本市)ビジネスキャリア科1年の学生6人も勉強のた

め参加。新聞を通して世代間の交流を深めた。各世代は新聞を読むのに、どのくらい時間をかけるのか。越地さんが、日本新聞協会による調査結果(2011年)を示した。平日の朝刊で15、19歳は12分、上の世代になるにつれて時間は増え、60代は34分、70代は41分だった。この差の理由は何か。越地さんの問いかけに、井戸端会議の有志たちは「私たちは時間に余裕がある」「若い世代ほどインターネット

トを利用するから」、学生たちは「若者の社会に対する関心のなさも影響している」などと答えた。さらに「若者の読読時間を増やすには、どうすればいいのか」と問われると、有志たちは「必要になれば読むので自然の流れに任せとみてはどうか」「読み方を知らない若者にはアドバイスが必要」と持論を展開。「その前に新聞を取っていない若者が多いのではなか」という、そもそも論も飛び出した。

知っている演歌は何曲？

「しんぶん井戸端会議」と熊本電子ビジネス専門学校の交流では、それぞれが世代間のギャップを認識する場面もあった。越地さんが用意したのは、5月24日の熊日夕刊に掲載された本電子ビジネス専門学校の交流では、それぞれが世代間のギャップを認識する場面もあった。

- 邦楽**
- King & Queen & Joker (Sexy Zone)
 - いいくらし(チームしゃちほこ)
 - 花道!!ア〜ンビシャス (SUPER☆GiRLS)
 - ぶっちゃけRock'n はっちゃけRoll/ベイビーステップ (ベイビレイズ)
 - 輝け (ファンキー加藤)
 - black bullet (fripSide)
 - 3GUTS!
 - Live (Superfly)
 - Dear☆Stageへようこそ♡〜 武道館LIVE記念限定盤〜 (でんぱ組inc.)
 - 形而上 流星 (BUCK-TICK)
- 5月24日の熊日夕刊に掲載された邦楽ランキング(上)と演歌ランキング
- 演歌**
- ひとり越前〜明日への旅〜 (大月みやこ)
 - 大刺根なかり月 (水川きよ子)
 - 鳥根恋旅 (水森かおり)
 - 峠越え (福田こうへい)
 - 桜貝 (五木ひろし)
 - 昭和男唄 (山崎ていじ)
 - 有明海 (北山たけし)
 - 一度惚れ (紅月)
 - アリアデルチ・ヨコハマ (チェウニ)
 - あやめ雨情 (三山ひろし)

か「初めて見る」といった感じだった。演歌部門を見た学生たちも、同じような状況。「五木ひろしと水森かおりは名前くらいなら」という声が出ただけ、しきりと首をかしげていた。

月刊 NIE Newspaper in Education

教育に新聞を

月曜朝イチで差をつける



「読む、書く、話す」の基礎力アップ

新聞で朝活!! 就活!!

＊しんぶんカフェ in 熊大＊

新聞をテキストに、「社会を見つめる力」
「考える力」「表現する力」を磨きます。

2014年度
秋

9月29日(月)
オープン

日時

※途中退室も可

毎週月曜(祝日は休み) / 午前7時30分～9時00分

場所

熊本大学黒髪南地区 学生ラウンジ

「REPOSER」(共用棟黒髪7の1階)

受講生募集(無料)

- ＊ 随時参加可
- ＊ 大学、学年、学部などは問いません
- ＊ 当日の新聞と、入れたてのコーヒーをセットでご用意



申し込み

TEL 096 (342) 2044 <右記センター>
E-mail : seisoken@gpo.kumamoto-u.ac.jp

カフェ店主・講師

熊本大学 政策創造研究教育センター 越地 真一郎
(熊大客員教授、熊本日日新聞社NIE専門委員)

学生 × 社会人

新聞で「切磋琢磨」

しんぶんカフェ in 学園大

日時

毎月 **第2、4土曜日**
午前 **10:00~12:00**

2014年
4月26日(土)
スタート

場所

熊本学園大学

図書館ラーニングcommons

募集

学生、社会人 **各20人**



就活力と仕事力アップ!!

新聞をテキストに、学生と社会人が立場を越えて切磋琢磨する新しい学びの場です

勉強も仕事も、「読む、書く、話す」が基本スキル。新聞の持つ「言葉力」を通じて、社会を見つめ、自ら考え、表現できる力を磨きます。

受講生募集・無料

新聞は当日朝刊を用意してあります

申し込み・
問い合わせ

熊本学園大学 学術文化課
TEL 096(364)8729

受付時間

月~金 9:00~17:00 土 9:00~12:30

カフェ店主・
講師

こえじ
越地 真一郎
(熊本学園大学招聘教授、
熊本日日新聞社NIE専門委員)

提案したい取り組みと資料

新聞記事を活用した地域防災の取り組み

—事前準備を考える「防災万全隊（ばんぜんたい）」—

鳴門教育大学客員研究員

益井 英子（元鳴門市北灘中学校長）

1 はじめに

防災において、地震や津波の想定などが、新聞などを通じて国民に知らされている。しかし、他人事のように感じ、情報が有効に活用できていないように思われる。例えば、徳島新聞 2014年5月25日付けの記事（後掲）では、「県災害時相互応援連絡協議会」が、南海トラフ巨大地震を想定し、その中で、避難所に身を寄せる人への、県内自治体の食料・水備蓄の不足を指摘している。

ここでは、他地域からの支援が届きづらい3日目までのうち、2日間は県と市町村が調達できるが、残り1日分は、住民が持参しなければ賄えないとの想定である。

一例をあげると、鳴門市では、食料備蓄が目標量の3割（2014年5月報道時点）に留まっており、今後、備蓄を進めるとのことである。

こうした対応では、個々の住民も意識しなくてはいけない。そのコーディネーションを、防災行政だけではなく、地域に根ざした公民館やNPOが行うべきではないだろうか。ここでは『防災万全隊（仮称）』を、各地で結成し、避難所での1日分の食料や品物を想定して、互いに持ち寄ることで、各自の家庭での不足をチェックするような参加型イベントを提唱したい。

2 防災万全隊の提案

万全隊では、まずは、なぜこうしたイベントを行うのか、その意義を説明する必要がある。地域の避難訓練などで住民が集合した際に、新聞記事などを通じて、現在の防災の課題を学習することが望ましい。県などから発行されているパンフレットの配布も効果的だが、新聞という身近な材料が、逆に危機感を高揚させることが可能だろう。

そして、日時を決めて、日分の食料などをナップサックに入れて、公民館な

どに集合してもらう。この取り組みは、全国各地で、「防災ピクニック」という名称で、すでに実施されているところもあるようだが、徳島県ではやや緊張感を持った取り組みを企画する方が望ましい。時間や事情が許されれば、避難所での炊き物などもできればいいが、自主防災団だけに任せず、住民の率先した取り組みを目指す必要があるだろう。

現在、国は、被災地への支援に時間がかかるとして、家庭に1週間以上の備蓄を求めている。避難経路の確認や、各家庭での非常食の備蓄や必需品の準備などの確認を、お互いに確認しあう中で、平時よりの地域のコミュニティーを高め、災害時での相互扶助などにつなげたい。



徳島新聞 2014年5月25日付

3 指導例

(1) めあて

- ①日頃の生活の中で防災を意識し、非常時の備えをしっかりとしているか。
- ②各家庭における「災害への備え」をチェックする機会とし、緊急時の「持ち出し品」を確認する。
- ③自らの命を守るための、「自助」の意識を高める。
- ④地域社会の一員としての役割を自覚し、責任ある行動が求められていることを認識する。(共助の精神)

(2) 企画方法

- ①地域リーダーとして、企画を周知する。
この周知が重要である。楽しい行事でもあるというニュアンスが必要である。
- ②新聞記事(後掲)を使い、公助の難しさを理解してもらい、自助・共助の必要性を知る。
- ③1日分の食料などをナップサックに入れて、公民館などに集合してもらい、会食しながら、情報交換を行う。(ワークシート活用:後掲)
こうした動きが地域防災を強化するのである。

防災万全隊（ワークシート）

1 あなたは、日頃の生活の中で、防災を意識した「非常時の備え」ができていますか。家族でどんなこと話していますか。

・
・

2 すばやく避難バックを取り出し、必要な物を詰め、危険な箇所をチェックしながら、避難所にたどり着きましたか。気づいたことから書き出してみよう。

（例）・備蓄品、避難所までの時間、危険箇所など

・
・

3 再チェック（皆さんで話し合っ）し、非常時の備えとして不足していた品物を書き出してみよう。

・
・

4 災害から身を守るために、日頃からどのようなことを心がけることが大切なのだろう。あなたのライフスタイルを見直し、具体的な取組を書き出してみよう。

・
・

県内自治体の食料・水備蓄

沿岸部で不足目立つ

人の食べ物や飲料水がどの程度必要かを示し、県と市町村の目標量を定めている。徳島新聞の調べでは、津波による避難者の割合が高い鳴門、小松島両市や美波、海陽両町などで不足が目立っている。

官民で120万食を確保し、避難所生活を乗り切ろう。徳島県と24市町村でつくる県災害時相互応援連絡協議会が3月、南海トラフ巨大地震を想定した備蓄方針をまとめた。避難所に身を寄せる20万

備蓄方針によると、他地域からの支援が届きづらい3日目までは、県と市町村それぞれが1日分を調達し、残り1日分は住民が持参する。4日目以降は民間事業所などから提供を受ける。「流通備蓄」や国などからの支援で賄うとした。

県の被害想定によると、発生直後は20万2200人が避難所で過ごす。避難者1人につき1日に必要な食料は2食、飲料水は3リットル。県と市町村でそれぞれ約40万食と約60万リットルを2018年度までに確保する。

県内自治体の備蓄

市町村	避難者(人)	食料(食)	水(リ)
徳島市	93,300	117,000	408,500
鳴門市	20,000	12,450	40,000
小松島市	18,800	27,314	27,492
阿南市	25,900	52,812	157,914
吉野川市	3,900	10,920	3,000
波島市	3,000	300	16,250
馬好市	2,100	38,000	190,000
三浦町	910	6,464	3,000
勝浦町	720	5,302	600
上勝町	230	1,700	なし
佐那河内村	100	950	なし
石井町	3,700	21,610	8,330
神山町	320	4,410	なし
那賀町	1,200	7,860	1,800
牟岐町	2,000	7,480	66,768
波陽町	3,000	5,200	12,000
海陽町	3,600	3,360	1,092
北島町	4,900	12,222	199,000
住野町	6,500	19,900	78,000
藍板野町	4,700	18,192	23,100
上板町	1,700	4,800	5,184
つるぎ町	920	3,480	900
東みよし町	320	1,230	1,375
	500	18,042	9,054

避難者数は県の被害想定。食料はアルファ化米や乾パン、ビシケット類などの合計。水は耐震性貯水槽による備蓄も含む。佐那河内村と神山町は浄水装置により確保する。

調達・更新の予算確保難しく

道路寸断などによる孤立化を想定し、独自の目標を設けている自治体も目立つ。神山町は全て現物でそろえる。那賀町は人口9517人の3日分の半分はアルファ化米を2千食蓄え、那賀町は人口9517人の3日分の半分は、おかゆやレトルト食品といった幼児や高齢者向けの食料の備蓄を計画する。

海陽町は避難場所やルート整備に予算を重点配分してきたため、備蓄をスタートさせた。鳴門市は食料の備蓄が目標量の3割に達している。阿波市は備蓄が目標量の3割に達している。阿波市は備蓄が目標量の3割に達している。阿波市は備蓄が目標量の3割に達している。



美波町の備蓄倉庫。2014年度は要援護者の食料整備を進める。同町西の地

住民の備蓄は避難所への持参分のほか、自宅でも過すための備蓄が必要だ。政府が3月に決めた防災対策推進基本計画では「自活のため最低でも3日間、可能な限り1週間程度の備え」を啓発するよう自治体などに求めている。

(まごめ・北野昇)

新聞記事を活用した家庭学習の支援

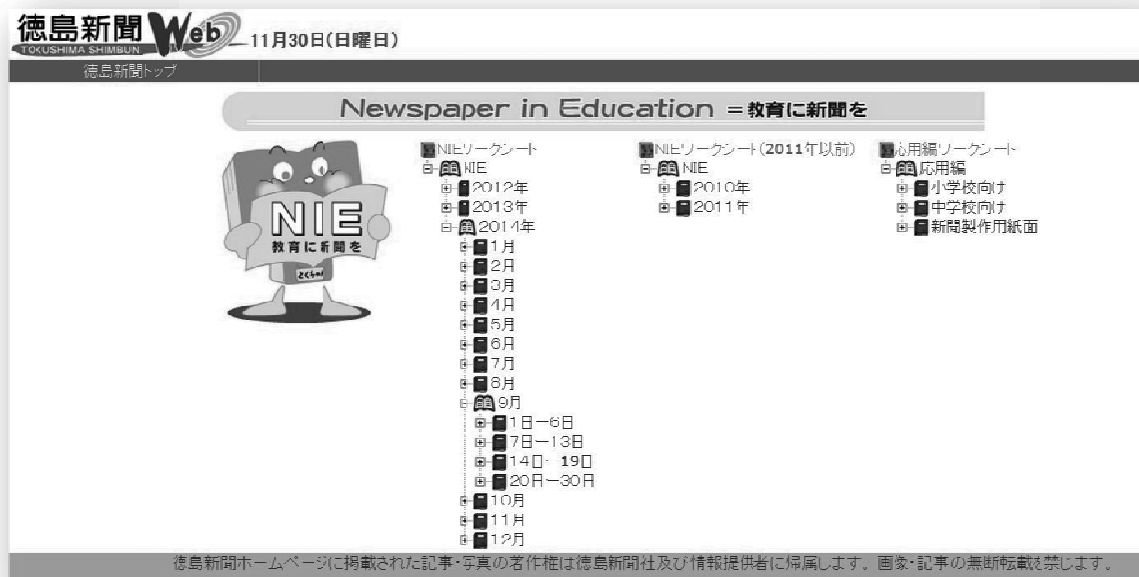
1 注目される記事を使う

新聞は、高齢者にも子どもにも理解出来るように構成されている。それを活用すれば、学校以外での教育活動もスムーズである。特に、地域で話題になっていることをテーマにすれば、興味関心を持ちやすくなる。

ここでは、中村氏のノーベル賞の記事を活用したい。特に号外は、徳島新聞のWebからも取得できるため扱いやすく、内容も簡便である。出来れば、それを再構成化した資料（下記）を使って、話し合ってもよい。

2 活用できるNIE用ワークシート（徳島新聞社の事例）

徳島新聞社では、NIE用のワークシートを作成し、公開している。これを活用されることをお勧めしたい。 <http://www.topics.or.jp/nie/>



(1) 徳島新聞記事から（2014年10月14日付）

徳島新聞社がホームページ（HP）に掲載している「とくしんNIEワークシート」の閲覧件数が、10日までに累計25万件を超えた。ワークシートは新聞を使った授業に気軽に役立ててもらうのが目的。小中学生が対象で新聞記事の切り抜き、設問、模範解答をA4判2枚に収め、PDF形式で提供している。例えば、小学校1、2年生向けでは、徳島市のとくしま動物園のレッサーパンダに赤ちゃんが生まれた記事を取り上げ、動物名を探させたり愛称を考え

させたりする。3～6年生向けでは、柿の収穫風景写真を見て見出しの言葉を考えさせ、柿が入った俳句を探させる内容になっている。

(2) ワークシートの活用法 (徳島新聞社のNIEのWebから)

徳島新聞社では、授業で新聞を活用しやすいよう、徳島県内でNIEに取り組んでおられる先生方のアドバイスを元にワークシートを作りました。ダウンロードしてA4判用紙にコピーしてお使いください。

シートは概ね一週間のニュースの中から選び週5本くらいのペースを基本に増やしていきますが、授業にふさわしいニュースが多い場合は増やすこともあります。

応用編は、授業で新聞を活用している小中学校の先生方の協力をいただき、授業でそのまま使えるワークシートのひな形を掲載しています。新聞記事と設問をセットにした「とくしんNIEワークシート」とともに、ご活用ください。

提供していただいたのは小学校の4年生向けが兵庫県宝塚市立すみれが丘小学校・田中敬子先生、中学校の国語向けが大阪市立昭和中学校・植田恭子先生（日本NIE学会副会長）です。



このように、同社は、新聞の教育活用を重視しており、現在は、「週刊阿波っ子タイムス」なども発行されている。そこにはNIEのページがあり、上田正純氏（NIEコーディネーター）の記事は、新聞活用に大いに参考になる。

公民館でのNIEは、土曜や休日活用などで、子どもたちを集め、自主的に行うことをお勧めしたい。学力向上などの取り組みで大切なことは、学校だけに任せず、家庭や地域が学習面で取り組むことが求められている。しかし、教科書などを使う学習を、公民館等で行うことは馴染まない。そこで新聞なのである。なお、図書館や公民館などの公的施設には、新聞の常置場所を作り、誰でも読めるような配慮が必要である。それが人を集め、情報ステーションの役割を担うものである。なお、新聞社に協力を得れば、出前講座も可能である。徳島県での問い合わせは、徳島新聞社編集局読者室であり、NIE推進担当部長である三谷徹氏は、徳島県内の学校を中心に、精力的に出前授業を行っていることを付け加えたい。

月	日	年	組	名前
---	---	---	---	----

「最高のプレゼント」

恩師・多田さん感激に浸る

「長く、長く、長く待った。ノーベル賞に一番近い男と言われながら十数年。本当に良かった。できるなら今すぐ握手をしたい」。徳島市城東町2の自宅で中村さんのノーベル賞決定を知った恩師の多田修徳島大名誉教授(92)は感激に浸った。

中村さんが大学4年から大学院2年までの3年間、指導教授を務めた。理論派の中村さんに「本を読むな。実験をしろ」と叱咤(しつた)した。粘り強く研究を重ねる中村さんに「彼はよく辛抱したし、辛抱のできる男。私も職人だが、中村はそれ以上に職人」とたたえた。



多田修さん

京都の企業に就職が内定しながら、卒業間近になって「徳島にいたい」と言い出した中村さんを、知人だった日亜化学工業創業者の故小川信雄さんに紹介した。「最初は優秀すぎる人物は必要ないと断られたが、英語での試験を中村は完璧にこなした。それでほれ込まれた」と当時を振り返る。

ただ「ふざけたやつじゃ。仲人をしたのに年賀状1枚よこさない」。それが昨年12月、不意に友人らと自宅を訪ねてきた。約2時間、たわいな話をした後、中村さんが「次回受賞できなかったら自分な」と漏らしたという。「それで今回の受賞。思えば意味深な言葉だった」と語った。

その際に土産として中村さんが持ってきたランプを手に「もっと気が利いたものを持ってきたらいいのに」と苦笑い。「でも、私が生きている間に取ったノーベル賞が最高のプレゼント」と喜んだ。(柳澤良和)

(2014年10月8日朝刊社会面)

- ① 中村さんの恩師の名前を年齢を書きましょう。
- ② 中村さんは、いつ、どこで、どのくらいの期間(①の答え)恩師に指導を受けたでしょう。
- ③ 指導の中で、理論派の中村さんを叱咤したそうです。どんなふうに叱咤したのでしょうか。
- ④ 恩師は中村さんのことをどんなふうにたたえたでしょう。
- ⑤ 「ふざけたやつじゃ。仲人をしたのに年賀状1枚よこさない」や、「もっと気が利いたものを持ってきたらいいのに」という恩師の話からどんなことを感じますか。
- ⑥ 恩師の今の気持ちが一番良く表れていると思われる言葉を書き出しましょう。

とくしんNIEワークシート/ノベル賞恩師・多田さん感激に浸る（解答）

答 え

① 中村さんの恩師の名前を年齢を書きましょう。

多田修 さん

92歳

② 中村さんは、どこで、どのくらいの期間（①の答え）恩師に指導を受けたでしょう。

徳島大学

大学4年生から大学院2年生までの3年間

③ 指導の中で、理論派の中村さんを叱咤したそうです。どんなふうに叱咤したのでしょうか。

「本読むな。実験をしろ」

④ 恩師は中村さんのことをどんなふうにたたえたでしょう。

「彼はよく辛抱したし、辛抱のできる男。私も職人だが、中村はそれ以上に職人」

⑤ 「ふざけたやつじゃ。仲人をしたのに年賀状1枚よこさない」や、「もっと気が利いたものを持ってきたらいいのに」という恩師の話からどんなことを感じますか。

〈文例〉父親が自分の息子に話すように遠慮がない。教え子と先生という立場を越えて、父と子のような気持ちで見ているのだろう。職人氣質の先生だから素直に褒めるのは照れくさいのだろう。少しらんぼうにも感じる言葉遣いは、中村さん本人が聞いたら、丁寧な言葉よりも深い愛情がこもっているとわかるのだろう。

⑥ 恩師の今の気持ちが一番良く表れていると思われる言葉を書き出しましょう。

「でも、私が生きている間に取ったノーベル賞が最高のプレゼント」

徳島新聞出前授業「**新聞記者になろう**」受け付け中

問い合わせは読者室 電 088(655)7418

※ 難しい漢字や言葉は辞書で調べましょう

※ 設問は一つの例です。授業の目標や学級の実態にあわせて自由に変えて使ってください

※ 先生方へ…取り上げるテーマや「この設問はうまくいかなかった」「こんな設問でうまくいった」等、ワークシートについてのご意見をお寄せください

読者室 FAX (0120)550380

速報

徳島新聞

2014年
10月7日
火曜日

徳島新聞社
徳島市中徳島町
2丁目5番地2
電話(088)655-7373

中村氏 ノーベル賞

青色LED物理学賞

開発し実用化 赤崎・天野氏も

【ストックホルム共同】スウェーデンの王立科学アカデミーは7日、2014年のノーベル物理学賞を、省エネで長寿命の次世代照明に使われる青色発光ダイオード(LED)を開発した中村修二・米カリフォルニア大サンタバーバラ校教

授(60)、赤崎勇・名城大終身教授(85)、天野浩・名古屋大教授(54)の3人に授与すると発表した。日本人のノーベル賞受賞は、12年の医学生理学賞の山中伸弥京都大教授(52)から2年ぶりの快挙で20、21、22人目となる。物理学賞は10人となる。



ノーベル物理学賞を受賞した中村修二氏

り、日本の物理学の高い実力を示した。LEDは1960年代に赤や緑が開発されたが、光の三原色のうち青は難航した。名古屋大教授だった赤崎氏は89年、窒化ガリウムの結晶を作り、世界で初めて青色LEDを実現した。中村氏は日亜化学工業(阿南市)で、窒化ガリウムによる非常に明るい青色LEDを独力で作った。

中村修二氏(なかむら・しゅうじ)1954年5月22日、愛媛県瀬戸町(現・伊方町)生まれ。愛媛県立大洲高、徳島大工学部を経て同大学院修士課程修了。79年阿南市の日亜化学工業入社。88年フロリダ大に1年間留学後、青色LEDの研究を始め、93年製品化に成功。94年に徳島大から博士号取得。99年日亜化学退社。2000年2月から米カリフォルニア大サンタバーバラ校教授。愛媛大と東京農工大の客員教授も務める。仁科記念賞、本田賞、米ベインジャミン・フランクリンメダル、ミレニアム技術賞など受賞。カリフォルニア州在住。60歳。

授賞式は12月10日にストックホルムで開かれ、賞金計800万堀(約1億2千万円)が3人に贈られる。

徳島新聞ご購入申し込みは 0120-46-1940

地域N I Eの意義とは

京都教育大学 教授

平石 隆敏

(日本N I E学会常任理事)

「新聞は社会の公器」といういい方があるが、この意味からすれば、むしろ新聞は家庭や地域、社会において人々を結びつける「媒介（メディア）」として機能するのがもっともふさわしいのかもしれない。たとえば17世紀後半から18世紀の英国ロンドンで花ひらいていた「コーヒー・ハウス」の文化において、人々はコーヒーを飲み、店におかれた新聞や雑誌を読みながら、社会や政治、文化など時々の話題についてさかんに議論をかわしていたように。¹⁾

1 学校の外でのN I E

これまでの日本のN I E活動は、基本的に「学校」を中心に展開されてきた。親子で新聞（記事）をかこむ「ファミリー・フォーカス」²⁾にしても、あくまで教員の主導のもとに、家で新聞記事について話し合ってくる宿題としておこなわれることが多い。しかしたとえば韓国では、文字通り「家庭」を舞台としたファミリー・フォーカスも熱心におこなわれている。親子の相互理解や意見交流、また子どもの学習意欲や社会への関心を動機づけることを目的として、それぞれの家庭が主体的に、記事をめぐる対話や新聞スクラップなどにとりくんでいる。そしてファミリー・フォーカスを推進する役割をはたしているのは、学校ではなく地域の図書館であって、図書館主催の母親向けN I E講座には多くの母親がつめかけているという。³⁾

日本でも、たとえば元中学校教員の渡辺裕子氏は、仙台で「地域N I E」にとりくんでいる。⁴⁾かつて教員として教室でのコミュニケーションづくりのために新聞活用をもちいた経験をいかし、今度は場所を地域社会にうつして、近所のおじさん、おばさん、お年寄り、子どもたちの「近所づきあい」という地域のコミュニケーションの再生をはかろうというN I Eの実践である。

またそれ以外にも、地域の市民講座などで新聞を活用した講座やワークショップなど地域でのN I Eのさまざまな取り組みも、すでに広くおこなわれはじめている。なお、日本新聞協会が主催して毎年、全国のN I E実践者・関係者をあつめ「N I E全国大会」が開催されているが、2011年度の大会では「地域N I E」をテーマとした特別分科会がはじめて設けられている。⁵⁾

2 「地域づくり」のためのN I E

近年、地域コミュニティの再生が求められている。その背景にあるのは、地域にくらす住民同士のコミュニケーションがうしなわれ、人間関係が希薄化することで、地域社会がたんに「たまたま隣り合っただけの見知らぬ人々の集合体」にすぎなくなっていること、またそれによって地域コミュニティは、地域のさまざまな課題に主体的にとりくむ力をうしない、ただ行政に対処をゆだねるだけの受動的な存在となってしまいがちなことである。

したがって、こうした地域コミュニティの潜在力をよびおこすためには、二つの視点からの「学び」が重要である。⁶⁾

一つは年齢や経歴、生活や関心もことなる地域社会のさまざまな人々のコミュニケーションをつくり、それを通じて地域の人間関係を構築するための学び。もう一つは、地域の課題に住民自身がとりくみ、解決をめざそうとする課題解決と社会参画のための学びである。

すでに学校教育での経験の蓄積から明らかなように、新聞の活用はこうした学びにおいて効果を発揮する。

新聞をかこんでさまざまな話題について語り合う学びは、自分が感じたこと、考えたことを人に伝え、また人の意見に耳を傾けるといふ「伝えあい」の力を育て、伝えあう関係をうみだす。しかも地域では、学校の場合よりも、はるかに世代も経験もことなる多様なメンバーによる交流となる。

また社会や地域の出来事や話題、そして自分たちの生活のなかから、地域の課題をみつけだし、その課題を探究し、解決の道をさぐることに、そしてさらに課題の解決をはかったり社会に発信したりするような社会参画の活動、これも総合的学習などでおこなわれてきた一つのN I E学習のスタイルである。

とくに地域社会には、有用な経歴や専門知識をもつ多様な人材が豊富である。なかでも高齢者の経験と知恵を生かしていくことは、高齢者の社会的孤立を防ぐ意味からも重要になるだろう。⁷⁾

3 今後の課題

このように考えると、これまでの学校教育でのN I E実践で積みかさねられた蓄積を、さらに地域社会におけるN I Eへと展開していける見込みは十分にある。また地域には、その場所となりうる図書館や公民館、学校などものも存在している。

今後に向けては、地域でのN I Eをどのように組織的に支えていくか、そして地域N I Eを運営するファシリテーターをどのように養成していくかの二点が課題になっていくだろう。

註 本論考を含め、N I Eについてもっと知りたい方は、「小原友行・高木まさき・平石隆敏編著 『はじめて学ぶ学校教育と新聞活用—考え方から実践方法までの基礎知識』 2013年 ミネルヴァ書房刊」を参照されたい。

(参考・引用文献)

- 1) 「コーヒー・ハウス」は、いまの喫茶店とは大分イメージがことなり、いわば人々が情報や意見を交換するためにつどうサロンとして機能していた。なお当時、ロンドンには2000軒以上のコーヒー・ハウスがあったといわれている。小林彰夫『コーヒー・ハウス』1984年、駸々堂、参照
- 2) 小原友行・高木まさき・平石隆敏 『はじめて学ぶ学校教育と新聞活用—考え方から実践方法までの基礎知識』 2013年 ミネルヴァ書房 参照
- 3) 妹尾彰・福田徹『新聞を知る・新聞で学ぶ』2006年、晩成書房、123頁以下参照
- 4) 渡辺裕子「地域N I E巡回講座 N I Eで向こう三軒両隣」(2008年4月) (<http://www.nie.jp/about/report/society.html>) 参照。なお渡辺氏は、東日本大震災をへて、現在は震災を語る地域N I Eにとりくまれている。
- 5) 提案者は、渡辺氏をはじめ、日本N I E学会前会長の影山清四郎氏、熊本大学客員教授の越地真一郎氏の三人
- 6) 2007年1月、中央教育審議会「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方策について」(中間報告) 参照
- 7) 2012年3月、超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会「長寿社会における生涯学習の在り方について」参照

編集後記

地域N I Eを企画するー学力向上・読解力育成・社会性育成ー

本冊子は、地域での新聞活用について、その手法を提言するために作成したものである。キーワードは、地域コミュニティの活性化ではあるが、最も大きな効果を生むのが、意外に子どもたちなのである。過去は、公民館などで子どもたちの歓声が聞こえていた。今はどうだろうか。地域の年齢の異なった人たちが集まり、お互いに情報交換する機会が減ったように思われる。大人から子どもへの知識の伝達の場合が少ないのである。

では、何をどうしたらいいのかという問いが返ってくるが、そこで“新聞”なのである。誰でも手に入り、いつでも使えるからである。これを有効に使うことにより、学力向上、読解力育成、社会性育成をめざせるとすれば、いずれも、現在の学校課題なのである。そう簡単なことではないからこそ、地域でも取り組む必要があるだろう。学校と家庭と地域の架け橋になって欲しいのである。

(謝辞)

今回、実践事例を紹介いただいた渡辺氏、赤池氏、越地氏には、詳細な資料を提供いただき、大変感謝しています。また、構想時点において、理論面で支えていただいた影山前会長、小原会長、平石教授、監修にあたって協力いただいた日本N I E学会企画委員会の、橋本氏、松岡氏、前野氏、藤川氏には厚く御礼を申し上げます。

2014年に徳島県で開催されたN I E全国大会において、地域N I Eの特別分科会が設定されました。その仕掛け役であり、県内で精力的にN I E普及に取り組んでいる徳島新聞の三谷部長、そして、N I E指導にあたる上田コーディネーターは、県内N I E発展の大黒柱です。これら多くの方々にご意見をいただきながら、本冊子が完成できたことが大変嬉しく思います。感謝の言葉をここに記しておきたいと思えます。

発行 鳴門教育大学地域連携センター
発行人 阪根健二、益井英子
発行日 2015年1月31日